

麻 生 路 郎 主 宰

川柳雜誌



四
月
號



大正十三年三月三日第三種郵便物認可

昭和八年四月一日發行（每月一日發行）

第十卷 第四號

川柳雜誌社發行

清 酒

白 鶴 禮 讚

白鶴をチントンシャンと提げて来る
午後六時白鶴が待ち妻が待ち
百意思の如く白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す千曳き出す千
腰掛へ白鶴狭う飲むまさ
來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ
白鶴が縁こはなりぬ君こ僕
白鶴に素直な父こなつて寝る

攝津灘

嘉納合名會社釀



養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

ドーマポ椿豆伊

精の椿島大 一唯産國

輝
く
美
髪



伊豆椿香油本舗

いさ下用愛御に直今
りあに店薬品粧化名有國全



川柳雜誌 第十卷 第四號目次

題字 麻生路郎 表紙繪 橋本榮助

作爲といふここに就て

松盛 琴人…(三)

武玉川初篇研究(十)

梅本秋豊屋 蛭子省二魚…(八)

千日前今昔史(終)

木村半文 錢…(四)

硝子の室

住田 亂耽…(二八)

だんだら模様

長野 吉高…(三)

肱枕艸紙

梅本 塵山…(五)

評合句を味ふ

琴人・亂耽・二南・華水…(六)

武玉川初篇研究疑義に就て

秋の 屋…(三)

丹か舟か

森 東 魚…(三)

川柳味とは何ぞ

松丘 町二…(五)

僕

山本 三巴…(四)

飛燕往來

諸 家…(四)



髪に吻づく……………石曾根民郎…(六)

八束支部雜記……………廣江天痴人…(九)

加古川訪問記……………生田翠夢…(一〇)

窓のない部屋……………澄田羅門…(三)

春……………中野裸人…(四)

川柳塔……………麻生路郎選…(四)

二南、町二、亂耽、水車、柳路、新水、綠雨、明珠、夕鐘、華水
鮎美、春秋、夢裡、靜太、沒食子、おさむ、日本村、小柳子、天
痴人、紅、變人、竹楓、柳人、民郎、英賀夫、光哉、禿山、翠峯
綠之助、美夜路、錦石、白峯

粒々集……………(七)

久流美、五健、鞍馬、柳秀

近作柳樽……………麻生路郎選…(四)

光耀抄……………麻生霞乃選…(五)

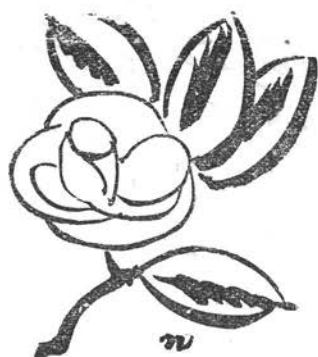
一路集……………(四)

刃物……………松盛琴人選
蛙……………安西杏三選

花見……………中島鐵洲選

各地柳壇……………(五)

西之町MEMO……………綠雨…(四) 編輯の窓……………町二…(六)



川柳塔

…選郎路…

敬遠と知らず大將株に井二南
 自家用の中は姫様とも呼ばれ
 問ひ直せども院長の悲觀説
 蒸タオル美人へ無駄な湯氣を立て
 濃霧の大阪
 人もビルも夢のつゞきとしか見えす
 ヨーヨーを返して呉れぬ兄となり
 惡酔へそれぞれ味方らしくゐる
 膝へ來る子の息甘し松丘町二
 春の星女の鼻が冷えてゐる
 尿したり雑草の花尿に濡れ

風車西北の晴眼に眩し
 吹雪霽れて電線ごとく雪する
 春が來た溝がいちにち泡を育てる
 住田 亂 耽

丁氏とS氏

お互ひは雜學博士紅茶のむ
 アートちゃん

弟を騙すうどん屋への電話
 かほるさんへ

春の畫極彩色の葉書くる
 世話好きの辨當持ちで駄けまはり

戀人時代のそのまゝの妻
 虫干のやうに税關ならべさせ

踞づくものゝ一つに金庫あり
 枕許ちらけて病氣少しよし

うすりの丸から駈落らしいも降りる
 借りに來た眼にくらしい妻楊子

行つたですあるですときな話し振り
 舊友を改まらせる若夫婦

同じ社に勤め縁談持ち込まれ
 三月十一日

親も子も雪の大阪眺めて居
 橋本 緑 雨

車路

水

雨

○ 西村明珠

戸を叩く勇氣は出たが借りて來ず
火鉢には火種が切れて春なれば
どつちでもよいとはいふが合ひ過ぎる
月給の袋が風で散りそう
マイナスに春の時候がしてしまひ
日曜だ青い空氣を吸ひに行て
大望へ雨風さへも氣にならず
齒車の音人間を疲れさせ
剃刀をあてゝ生活線へ出る

姫田夕鐘

疲はげばたんがころ／＼砂ぼこり
あの妓と春の霞へ消へるなり

歌舞伎座にて 太鼓音智勇三略(二句)

うたゝ寝へ姉は椅の裾をかけ
家康は別れを眠たさにしてしまひ

口上

のつけに頭上げたは鴈次郎

勸進帳(二句)

太刀持はしびれの切れぬ顔でゐる
詰め寄れば辨慶大きく波を打ち

時雨炬燵

殺されに來たのがきつい口をきゝ

道行旅路花聲

道行の延壽の喉をうたがはす

日野華水

不首尾だつた子が諦め切つた部屋
すれ違ふ番傘の中の浪花節
大高がやつて來そうな橋の雪
自轉車に子供を積んで土手を行く
運送店もう直きに着く汽車があり
おかしくもない平面を汽車が行き
縁なしの眼鏡でマダム柱に居
まぼろしを慕ふでもなく娘が肥り
水谷鮎美

下女の生毛の埃りにまみれる
一粒の麥を癖視の佛達

古木君の結婚を祝ふ(二句)

おもしろき夜の魂が飛びこんだ
主婦の友よごれる春の合唱よ

晩春君の二男出生を祝ふ

掌の溫みおぼゆる冬に男の子

歸國

家内中機械になつてうごいてゐる

喜多春秋

電話室丁度いぢくるものがあ
求職者晝から來いに氣がくちけ
親といふものは叱つて火鉢に
腕組んで手錠を腰に沖を見る
冷笑を覺悟してゐる求職者
テ一ブ皆切れて船體向きをかへ

村松夢裡

御座なりにしても陽氣な酒に酔ひ
あきらめてゐるが三千圓の籤
格好もとれない顔の厚化粧し
生きる身の情無いのが合掌し
世の中も知らず五女だの六女だの
唇をゆるしてしまつた夜のしま
冬の陽のロイド眼鏡とマンドリン

太

其後のFへ
駈落と知らずに犬のたはむれて

病床吟(二句)

弟の戀の話をきゝるたり
死ぬまぼろしはいやですいやです

子

恩師若林醫博病む

診てもらふ立場になつた聴診器
判任官の昔なつかし小商
金の要る事は好かない彼氏の眼
今貼つたピラ春雨に濡れてゐる
賣れぬ餘波問屋と家主にも及び

む

ふとももの素晴らしさなりレヴユウなり
検事局のドアの殊更音がする
日銀の前でギヤングをおもふなり
女やつぱりたゞの女だつた朝霧より

岩垣日本村

尼講のどれも淨土を知つた顔
留守の晝爪の行衛も見定め
殘高はもうタクシーに乗れぬなり
交叉點身體髮膚うろたへて
叱られて月と親しくなる心柳子
學生等の輕き歩みが淋しくす
水呑みてしばらく月をみてゐたり
廣江天痴人

祖父重症

俺もまたかくあらんかと酒を怖れ
云へばとて母よみがへる土ならす
造船所ミリタリズムの音がする
熊谷
熊谷紅

紅

良い天氣計り氣に成る若旦那
髯剃つてきて行く所の當がなし
屋臺鮮背二ヶ月の風が吹く
圓本を積んで威張つた事があり
臨月はかぶさる様におそひくなり
皆達者フト米櫃を覗くなり
妹尾變人

人

女心よ風が木の葉にふれる
碇泊燈に囁きそうな黒い波
耳かいて彼奴野心を丸める
藤竹楓

楓

奈良井柳人

黄昏へ心のうさの煙突や

貧乏の軒場に並ぶ春の鉢

非常時の空気に染まぬ三昧が聞け

稼ぐ指のよぐれをなめてしまふなり

人間と生れた甲斐を寝に返り

座談會無盡で蓄めた人も来る

荒井英賀夫

生甲斐がないとは淋しきことをいふ

體溫計いつちおまへは知つて呉れ

水田光哉

生きてゐるつもりか春を約してゐ

亡母に似た人あとつ奥野禿山

散髪を明日明日と世帯持ち

止せと云ふ女へ柵を飛んで見せ

生田翠峯

戎橋御芝居に似た雪がふる

みづるに寄する

新興の若芽の如く伸びよかし

尼緑之助

聯盟脱退

ジュネーブは遠し日本は梅が咲き

米村あゝ馬氏川柳生活二十五を祝して

二十五年出雲を飾る川柳史

寒空へ行政整理の首細八木美夜路

子を抱いて暫しは憂さを忘れんか

岸上錦石

寝ころべば草の匂ひに兒の匂ひ

宮岡白峯

一粒々集

金澤安川久流美

おもむろに説く方丈は能の面

おごそかに静けき心寺の門

朝々の怠けがちにぞ雀啼く

損じても怒らぬ心たくはへる

松山前田五健

日本刀ユラリくと馬を摩り

立腹の眼鏡や鼻を落ちんとす

宣傳をしてやるからとマケさせる

作業服地位を見せたる時尺馬

面白い話にパイプ焦げてゐる

脱帽をして馬場先の春の人

連込のあんまり若いのにあきれ

老夫婦梅見にふさはしく出かけ

口髭も落ち目になればみすばらし

二人の兒の氣が揃ひ買ひに出る

御影長崎柳秀



武玉川初篇研究

(十二)

梅 本 秋 の 屋
森 子 東 省 魚
蛭 二

(290) 叱られた夜の夜着はきせ捨

省 二 Ⅱ こんな小さい感情が、又興深き葛藤である。

秋の屋 Ⅱ 叱られた女房などが、良人に夜具をきせ捨てするといふの敷。臍の毛を引いてみればよいに、少し智恵が足りない
東 魚 Ⅱ 翁の評言に思はず失笑。夜半の訪れは断念めねばならない。

(291) 二の替り臺所から口を利

省 二 Ⅱ 今日の家庭にも、あてはまる。女に芝居は附物。

秋の屋 Ⅱ 「お草履を持ちましてもと下女御供」と云ふやうな場合であらう。

東 魚 Ⅱ 昔の女性が芝居に對する心持ちは、現今の芝居ござれ、オペラござれ、映畫ござれといふ便利な時代からは推察しつくせない。

(292) 踏れる戀もおとこ一疋

省 二 Ⅱ なし遂げ得ない、踏みにぢられる戀でも、男にとつては一箇半箇の歴史だ。

秋の屋 Ⅱ 「晦日に月の出る廓も、闇が有るから覺えてゐろ」と朝妻舟の相方で、花道へ一散に走つてゆく處であらう。

東 魚 Ⅱ 甘んじて自分の戀を捨てゐる所に、踏まるゝに委す處に男の確とした性根がある。と云ふ意味合ひではないか。

(293) 兩隣娘の咎を知て居る

省 二 Ⅱ 兩隣で證據をにぎられては、絶對絶命。

秋の屋 Ⅱ 壁に耳あり。

東 魚 Ⅱ 平凡な句だと思ふ。

(294) 捨鐘聞いて跡は推量

省二「鐘の三つは咳ばらひ也(ム十)で、初めの三つは數に入れなかつた。(二つの土地もある)。拾鐘の音に驚き、あたりの模様で時間の程は推量し得よう。「拾鐘を一つは味に聞て居(ム七)」

秋の屋「老人の夜半の寢覺には、屢々斯る事が有る。

東魚「大抵夜中に目が覺める時刻が、一定してくるやうだ近頃そんな風に段々なつて來た。拾鐘丈けではア何時だと合點出來るであらう。

(295) 後の追人に二親の聲

省二「後」に無限無量の感あり、「後の追人に女房の聲(武十四)がある。

秋の屋「冥土の飛脚」の龜屋忠兵衛も、此例に引く可きである。

東魚「全く、後の」に深い味がある。

(96) 袖留て師走の闇に突放し

秋の屋「師走に差迫つて、娘に元服をさせて、形ばかりの嫁入りをさせるの敷。

東魚「闇に突放し」がどうも苦界を連想させられる。工面して花魁が妹分に部屋を持たす場合ではないか。

省二「吉原關係らしいとは思ふたのである。

(297) 旦那の髪が出來て騒動

秋の屋「騒動の理由が一切不明。

東魚「旦那が奇麗に髪を結つたので、ヤキ手の女房が、これから何處へお出掛けです——サアそろそろ始まつたぞといふ場合ではないかと思ふ。

省二「多分そうであらう。が獨立句としては表現苦し

(298) 氣違もはやされてから藝が殖

省二「殖える藝に哀を催さしめる。(葦原將軍なども商會者が多いので、十歳も多く歸をよむようになつたそうだ。怪氣焰の藝も殖える丈け哀である)」

秋の屋「男では放齋、女では班女、謡曲にはこれに類似のものがある。

東魚「全くあはれさがある。

(299) 檢校は手を敲く産聲

省二「産聲を耳にして、手を敲く、眼の不自由な人の満足

の表示。

秋の屋「盲人の歡喜の態が、手を敲くに依つてよく判る。東魚「存外に興が湧かない。句調が餘り淡々としてゐる。内容に適切でないかも知れない。もつと躍動的でありたい。

(300) うき世の下卑に揚屋下さび

秋の屋「揚屋町には、中等の妓樓が多く有つたが、遊客が下卑て、更に下等の河岸通の妓樓へ往くやうに成り、揚屋町は衰微すると云ふのであらう。

東魚「成程、吉原の揚屋町で句意は分る。(一般的に妓樓のある町と解してもみたが)、散財客が少なくなつては世の中もケチ臭く下卑たものになつたものと云ふ意かと思ふ。

省二「せち辛い、そろばんづくでは、揚屋町遊びは出來ぬ

(301) 明る戸へつめたく障る氷室守

秋の屋「氷室守の身体は、冷たくあつたに相違無い。淺薄な句である。

東魚「夜叉郎の句「氷庫曳子をいれて寒むがらせ」があるその方が面白い。

省二 此句の反對を漫畫でみた。——牛車で水を運搬してきた人夫は、木蔭で涼をとつてゐる。氷藏の番人は水を運ぶため、汗を流してゐる。

(302) 日比の意趣をはらす芋虫

秋の屋 戀の叶はぬ意趣返して、これこそ虫が好かない奴である。

東 魚 日比の意趣と大層に云つても、さして根深いものではなく、軽く考へられる。——前に何かおどされた事のある女同士の戯れがかつた敵討とも考へられる。

省二 芋虫は女の嫌ふもの、だが高が芋虫なのだからイヤからせではある。男がするのだと思ふ。意趣は軽く解して可、

(303) 散る花を乗物の戸へあふき込

省二 浮世繪美の句である。繪にして美しく、句では餘り賞められもせぬ。

秋の屋 浮世繪美でも、色彩が濃厚に過ぎて、俗惡になつた句である。

東 魚 「あふき込」がわざとらしく、却て句を疵付けてゐるのだらう。

(304) 隣の耳へあたる言譯

省二 言譯も深入りしてくと、想棒を引張りだす。相棒こそ耳が痛い。

秋の屋 無智の女房の言譯などは、兎角に隣人の耳を痛からせる。

東 魚 面白い句だ。うがつた句だ。

(30) 目いしやの顔か見へて手を打

省二 手を打ちで喜びの全部を盡して居る。澤市など然り

「目醫者の顔が眞先に見え(武五)。

秋の屋 患者が拍手する所に、歡喜の色が顯はれてゐる。
東 魚 同感

(306) 紅葉の中へ幅な入相

省二 紅葉の頃は夕鐘の響と俱に、どん／＼暮れてしまふ幅な幅が利くなどと同様、威勢よく釣瓶落の夕暮である。

秋の屋 紅葉の多くある山寺などで、人の耳を驚かすやうな入相の鐘の音がする、と云ふので特に威勢がよいのではなく、薄暮の寂寞を破るといふ意ではない歟。

東 魚 紅葉は夕日に打映た處が見物であらう。其情景へ更に生命を吹込むやうに、晚鐘が聞える。全く此鐘は場面の立テ役者をつとめた譯——そこで幅な幅をきかして、立あらはれたやうに、鐘を讚美した心持であらう。

(307) 土産買傘へ時雨の音がする

秋の屋 土産といつても、市中の店で菓子か煎餅を買つてゐると、遽かに時雨が降出して、傘に音がすると云ふのであらう

東 魚 夕方の一情景が想はれる。
省二 傘の主をも想像し得よう。

(308) 錦木立て 菜のうへを行

秋の屋 錦木に止まつた蝶が飛立つて菜の花の上を行くのであらう。

東 魚 「立て」をタテと讀むであつたので、どうも解らなかつた。なる程、お説通りであらう。戀の心持に關聯しても肯ける。

省二 道具立ては揃つて居る。

(309) 命しらすの戻る岩はし

省二 石を飛びく川瀬へ列べて、渡るに便にしたのを岩橋といふ。危険が伴ふからである。

秋の屋 清涼山の石橋ではない歟。

省二 サテね。「乳母を跨て通る岩はし」武十三などを例にして、前記の如く解してみたが、こんな句もあり

岩橋の道を大工のたき付

武十七

御茶の給仕が岩橋となる

武十五

岩橋も手前でかけるぞうり取

武十四

妹もぐるで晝の岩はし

武十五

屋ね屋みてゐる晝の岩はし

武十三

戀句が交つて居る。

東 魚 蛭子氏の掲げられた戀句の方は、葛城の岩橋で、言はゞ戀の通ひ路の意である。(葛城の神が一言主に通ふといふ故事がある筈)。又、岩はしは「中たゆる」との意にも用ひるその時は蛭子氏の申された、水に飛びくの石の意味合から、さう云ふのであらう。本題の句はどうも戀の意ではなささうであるから、たゞ危険な石を飛びく歸りにも来る、二度と通る氣は起るまい、と云ふ丈けの意味かと思ふ。

秋の屋 再び按ずるに、「岩橋」は「ふみ通はせる」といふ謎で他人の爲に媒介して、艶書を遣り取りさせる事で、例へば高師直の依囑に由つて、鹽谷高定の妻に艶書を送つた、侍従といふ女のやうな役割をするのであると思ふ。蛭子君の擧げられた例句も又夫れであるが、此れは「拾遺集」卷十八にある春宮女藏人左近の歌、「岩橋のよるの契りも絶えぬべし明るわびしき葛城の神」に據つたのは勿論である。偕て、「命しらす」の句であるが、此れは高定の妻が、師直に艶書を送返して、遂に身を亡ぼした如く、他より送られた艶書を、邪見に突すのは、後難を恐れぬ命知らずだ、と云ふのではない歟。

省二 戀關係句は前諸説通りである。原句は例ば「くれゆ

けば木の下くらき岩橋のみたらし河に飛疊かな」の用法に類して居りはせぬかと、思はれてならぬのであるが。

(310) 持基に作て顔の見合

省二 碁かたき同志の妙味、一層。

秋の屋 破顔一笑。

東 魚 立つて振つて一日の勝、となられてはたまらぬ。

(311) しふ草夜着を幾つか跨越

秋の屋 木曾の棧道、一谷の鶴越に比す可き、難所は幾つもあるであらう。

東 魚 「しのぶ草」ときどつて云ひ乍ら、「夜着を幾つか」はチト淺薄だと思ふ。却てそこに可笑味があると云へば云へるが

省二 忍草などは、附合的な手法。

(312) 當させて心のうこく袴腰

秋の屋 此家の主人對腰元であらう。

東 魚 腰板の紐きを持つて腰へ當てる、後ろさまにはく方では紐へ手をかける、その時どうも手と手は觸れ勝ちになる味な模様である。人物はお説の如くであらう。

省二 「袴腰あてる娘は物ありげ」(武十五)とか、「袴腰氣強くあて」意趣はらしなどあり、袴腰の句悉く情緒的。

(313) 高尾が出来てよみ賣が出

秋の屋 幾十年目かに、何代目の高尾太夫が出来た。其翌日から「これは此度新吉原江戸町一丁目三浦屋に、何代目の高尾が出来ました、さあ御らうじろく」と互版を讀賣りする。

東 魚 こんなのびやかな時代が、美しくもある。

省二 原本には、濁點なし。

(314) 様々な人が通つて日か暮る

省二 造花の神の妙技。

秋の屋 午後四時過ぎての、東京驛前のビルディング街の光景は、全く斯の通りである。

東 魚 何でもないやうで面白味がある。様々な人が良い。

(315) 子守のもたれかかる裏門

秋の屋 寺院の門といふものは、子守等の好い遊び場所であつた。これは今も昔に變るまい。

東 魚 長閑な日ざしを想はせられる。

省二 裏門が、好い背景。

(316) 翌日足の立ぬ池上

省二 池上本門寺、——毎年お會式で人死のある雑園——は郊外なので、參詣疲れがある。「奥家老馬に乗りあく本門寺」旅の手本につかふ池上(武十六)

秋の屋 電車も自動車も無かつた昔は、池上までも往復は、随分困難であつたらうと思ふ。

東 魚 かう詠んだだけで、「池上へ行つた爲に」と直に合點出来る處に、句法の老練さがある。私も十三歳位の時、池上からあの邊を歩きまはつて、神田の家へ歸つた時は、這つて上つた事を、いまだに覚えてゐる。

(317) 異見した日の戸が早くたつ

秋の屋 戸が早く建つ理由が判明しない。

東 魚 流石に夜遊びも出來ず謹慎、早く寝るが無事だと云ふ心持ちであらう。

省二 異見したり、されたりした日は、双方とも、しむみりとして餘り口もきかない。こんな折りは早寝でもしてしまふ外、身の置き處がない様な感じがする。

(318) セツは人の耳につく鐘

省二 セツ時は申の刻(午前午後四時)、曾根崎心中の道行に、あれ數ふれば曉の、セツの時が六ツ鳴りて、残る一ツが今生の、鐘の響の聞をさめ、寂滅爲樂と響くなり——セツは必ずしも斯る場合に許り用ひては居らぬが、要するに曉の鐘として感が深い。

秋の屋 秋は曉のセツ時ではなく、夕のセツ時の鐘の響が、特に耳に附くと云ふ句だと思ふ。曉よりも夕の鐘が哀音を帯びてゐる。

東 魚 私はどうも、決めなくてもよろしい様に思ふ。

(319) 駿河の町の吝い初雪

省二 年中雪を頂いてゐる不二山下の駿河の町でも、初雪は僅少なものの、吝いと曲つたわけ。

秋の屋 目睫の間にある不二山に、大雪が積つてゐる故、駿河の市中の初雪は、殊更に僅少にみえるのだ。

東 魚 矢張り「吝い」と云ふ文字の使ひ様に面白さがある。「もつと降つてもよさうなものだ」と云ふ心持がある。

(320) 關守の淋しい日には物とかめ

省二 咎立てされて、關守の徒然のお相手はたまらぬ。

秋の屋 現今でも交番所の巡查は、日永のつれづれに乞食などを捕へて、無用の訊問をしてゐる。昔の關守もこれに似てゐたらう。

東 魚 交番に比すれば、もつと／＼恐ろしい場所に考へられてゐた關であるから、一言いはれても、非常に驚いたであらう、旅人の笑止な様が想はれる。

武玉川初篇研究疑義に就いて

秋の屋

「武玉川初篇研究」中の三句に就いて、寺川信君より疑義を提出され、且自説を述べられたが、其れはどうも首肯するところが出来ない。仍つて簡単に私の意見を吐く。

這ふ子の口に人形の舟

上巳の祓に、人形を舟に乗せて流し棄ることは、平安朝時代に行はれたけれども此の習慣は疾くに廢絶して、江戸時代には行はれなかつた。其れを題材として、當時の作家が句に詠むだとは想像されない。併し作家が「源氏物語」などを讀むで、「人形の舟を作句したものと言は言はれる。假に祓の人形の舟を詠むだものとすれば、「這ふ子の口に」如何にしたといふのである歟、句意が少しも判明しない。幼兒が木偶を甜めたので、其彩色の丹が、口邊に附着したものとすれば句意が判明して、疑義を挟む餘地は無いのである。

更行春に禿苦になる

平相國が、三百人の禿を使用した事は、「平家物語」其外にも有るが、此句の禿は遊女に使はれる禿に相違無い。都人が六波羅の禿を苦にするのならば、決して行

く春に限らない。行く春——遊里の禿、それが即ち句に成るのである。

はげしい親の呵そこない

此句に就いても、寺川君の説は、少し考へ過ぎのやうである。此れなどは餘りむ

丹か舟か

森 東 魚

武玉川論講に際して
這ふ子の口に人形の丹
の句の、外骨本舟とあるのに依つた礎稿に對して、原本引合せの上舟でなく丹である事を私が主張したのであるが、寺川氏の更に「舟」が本當なのではないかと云ふお説があつた。一寸拜見した時、私は疑もなく丹と信じきつてゐるので、原本を見もしないで——と、一寸、憤慨に

いと確信する。同氏も原本を御一覽下されば直ちに御了解下さると思ふ、且、俳諧八編に

這ふ子の口に人形の箔、

と云ふ類句がある。此の八編は、天明丙午とあるから六年で、武玉川初編の刊行寛延三年からは三十六年を隔てゝゐる。同一作者が、箔の方が更に良いと思つて改作したものではなく、恐らくは餘人の剽竊であらうと思はれる。この事實は問題の原句が「人形の丹」である事を裏書きするに充分であると考へるものである。敢て寺川氏の御再考を願ふ次第である。

づかしく解釋しないで、親が餘りに嚴格で、息子か娘の過失を叱責したので、家出をしたとか自殺したとか、意外の事件を惹起したと解釋すれば宜いので、特に劇的スチユエーションなどを想像せずとも可いと思ふ。失敬ながら寺川君は、古句の作者が想ひ及ばなかつた事までも種々附會して解釋されるやうである。

轉室

氷雨空重病室にゆく日なり

更生の日

野の青よぼくはあなたにかへります
午前二時時計がそつとうたつたな
親切に云うて利用をする氣なり
恩給がついて獨立未だ出來す
お化けにはそのまゝでよい顔なるに
スマートな容姿午後の人であり
株の値の動き生んが爲めに見る
大根と目刺に生をつゞけん乎
留守番へ留守番の要るいゝ娘
派手にさへすれば若いと思うて
引越して湯屋とポストに遠く住み
石鹼玉戀なき頬の艶に割れ
何かしら奇蹟またれる二十一
月末のつゞく赤字に未だ死なす
形相が凄い殺され相な日だ
激情の火となり吹雪衝いて出る
救命具備へてビルのそびえ立ち

發ケ他

堀

同

大阪

同

松江

愚寵

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

一期

平

路

八

豆

と擴大性を發揮して居るのだから、セク／とすに當らぬ。私共の武玉川初篇研究も、川柳詩研究の精神でやつて居ます。他人の畑の手傳をして居るのではありません。(三月十日)

局にゆかぬうちに、貴誌三月號着。寺川氏の疑義は悉く賛成出來ぬのが心苦しい。他二氏とも打合せましよう。書食(多分簡易食堂)るう)三度ぬいては「川柳雜誌」を購讀して居ると、若き人から通信がきました。綠雨君尊い告白だナ。誌代は安いがいゝ。安いのが川柳詩の特徴を如實に示す一證とも言へる。(三月十三日)(綴附)

▼齋藤松窓君(官部)餘寒未だ烈しく候處愈々

御清祥賀奉候、陳者かれて御依頼申上候。小生句集は愈々三月廿四日小生の誕生日に出來の事と相成候處、何分今回は小句集にて(十錢本)約五六頁を掲載する事と相成小生の怠慢により餘日これなくケラを御見せする都合つきかれ候に付序文の儀甚だ勝手ながら原稿紙一枚位の程度にて何か御書き願へば誠に結構と在じ候、御多忙中誠に恐縮に候へども五日頃までに相願度と存じ候、先は右御依頼まで。(二月廿八日)(綴附)

右川柳能因會より(島島自白)不浪人サンが東

京よりの歸途立寄り候、久し振り故是れより大に飲まんするものに候。先日御便りに御病氣も癒えて、御出掛の御様子切に御待ち申居り候(五花村)。青森の不浪人白河でそれ程白河は寒いのかしら、郷人は平氣です(汀舟)。十七日上京、今日退京の歸途白河に下車、川柳の話に花を咲かせて大いに痛飲しつゝあります。(不浪人)(綴附)

ビルディング女のひそむ影をもち
外客と女へ専務よく笑ひ
美しい姿信徒にさげしまれ

雨の天痴人君

ぬれぬれて蓑に重たく君は居る

新しき川柳を説く路郎師

あめつちにあるがまゝなる師の叫び
そぞろ悲しく行李に紐をかけるたり
地下足袋の尻に感じた砂利も春
百年の計でもないが杉を植え
貧乏して來たと悪友大ざつば
はるの鏡にこころつかれてゐるをんな
春風のはり切るちから僕は歩む
自暴自棄になれない僕は爪を切る
又來てね世辭とはちがふ聲になり
肩組めば男同志の血が通ひ
黙したり職に餓えてるまなざしに
偽善者へ吹いてやれやれ口笛を
やかましく喋る女で氣がとがり
穿き古るす足袋のコハゼに知る寒さ

大阪

松江

京都

島根

同

盛ヶ池

同

素同同慕 同同竹同同羅同同鴉同同噴同巷同

月 秋 雅 門 天 兒 巴

髮に吻づく

石曾根民郎



女といふものの膝のうへにもたれて、
目と目で交すひとときの情愛にいそむ
ことの出来ない性の私にとつては、ウオ
ーターウエーブのつややかな髪も、アス
ファルトをたたくハイヒールも、耳の横
からのもくカールも、さん／＼とふる月
光になまめく眉墨もいたく縁遠いもので
あるにはある。口説いたときに女がうち
／＼と櫛の齒をかざへてゐた横顔に接し
なかつたし、待ちわびる身はつらねを
持ちかけられて美しくすねられた背中の
自分でもなかつた。真裸となつてムシム
シと來る女の肉香がぐつと寄り添ふて來
たところ、それをどうあつかつてよい
のか、もてあまし過ぎる私なのである。
其場になつて眞剣に與太れそうもない人
間と自覺してゐる。それでは自分の身が
あまりもどかしくつて、じれつたくはな
いかとたしなまれても、黙つて頭をかた
むけて返事に困るらしい私である。しか

ランデブー寒いというて叱られる
一錢で撞いて寂しい旅の鐘
溜り水春の姿も遠からず

思ひ出の大阪

宵の灯が濡るゝ心齋橋通り
かんじよりをよつて役所の長閑なる
妨風のをやさしく堀りて君と僕
男にも櫛が要る春のある日
惚れてやるものかと春を悲観する
儲かつた噂の通り又圍ひ
寒釣りの夜盗の様な姿なり
總入齒洗ふ淋しき父の顔
團參の婆徽章まで有り難く

平凡とは結婚かや

妻持てばまさか無軌道でも居れず
喧嘩なら来いの昔に返りたし
座馴れした雛妓蜜柑をむいてくれ
妬かさうとすれば女房意地になり
どうすると云ふ案もなく昭和八
貸す方は軽く聞きつゝ欠伸する

大阪

石川

鳥取

金澤

愛媛

大阪

同

鳥取

尼崎

茶 山 緒 々

同 香 緒 縷

同 今 雨

同 南 葉

同 鯉 友

同 山 茶 花

同 耕 民

同 虚 白

同 虚 白

し女のこゝろと情緒とを味ふことが好きだし、この若い身空で退化したのでないかと思惟されるほど、回顧的になつて女を凝視することさへある。幻を追うてゐる戀のほかに、所謂出来かゝるなんのを期待してゐない今の私で、それが本當の自分の姿であらねばならないとまで消極的に見てゐる。行きすりの女の甘い體臭に享じてゐたその身は、すでに過去の匂ひとして忘れてしまひたいこゝろとなつて、あいづつのことをつけてやれなとの氣持を起したことがついでない。それゆゑに私は色つばい遊びらしい遊びをした経験がないといへばいい。だから「親より譲りの稼業をはげみ、其家儲に繁昌させて、世間を御子息方におわたしなされ、浮世ひまになつて、六十過て年月の氣晴しに、女郎狂ひをする物と御合點なさるべし。若い時參れば、血氣にはやつて、萬かさ高になり、漸々につのは致せど、止るといふ事金のある内にはいたしにくい物で御座ります」色三味線一をかすかになつかしがつてゐる。そのかといつて、決して色の道が六十過ぎてゐない。私のこゝろだけにそう秘めて、そのまゝ終つてしまつても氣のすむつもりである。俚語正調雜誌「分水嶺」に出た

理詰めばかりぢや通らぬ事と

その人を、酒も女も買つて見る
酒も女も買つて見る
その人を、憂さの捨てどころを握つた

故郷からのこの結びめは兄らしい
 嬉しさをそれとは云はず飯にむせ
 不孝者病氣になると思はれず
 責任を持つてゐるような髭をおき
 吸殻を数え金策待たされる
 俸給へ無事に勤めて嫁き遅れ
 机雑然と日曜のニヒリズム
 マスクいよ／＼病人めいた僕にする
 鶯が鳴いてもこゝは脳病院
 女給募集俺は男であるのなり

いのちの金を落す

せめて貧しき子に拾はれよあきらめむ
 ほつれ髪はのすがたのありがたき
 マネキンも口を入れたい支那のこと
 女客来てサービスが變るなり
 空想が金の出所でほぐれて來
 三味をひく後姿にたそがれる
 卷狐すました顔も狐らし
 上役が御不満らしいイロハ順
 口惜しさの唇は血の味がする

大阪

同

愛媛

長野

松江

大阪

同

同

愛媛

大阪

水 同 千 同 西 同 有 同 巷 同 流 同 元 同 木 同 孤 同 勝
 郎 吉 子 郎 二 助 山 奎 鶴 二

と考へるより、しつかと家を繁昌させて
 行きつくべきところに行きついたらと考へ
 てうそぶく、しかしどこまでも自棄的に
 なつた作者であるやうである。しかも私
 は「分水嶺」所載の

そして夜長のせめてを弾こか

逢はぬ幾夜の聴くか

を追つてゐる。はかない幻であるがゆ

えに却つていとしく、にがくほくそえむ
 ことにした

○ 蒼太君の發行にかゝる「麻尼亞」と

いふ民俗、風俗研究雑誌(第壹冊)の餘白

に、次の三句を蒼太君がものされてゐる

がつくりと崩れし髭の暗の部屋
 薄暗く寝顔の白きいらだち

かい抱く枕の香の今宵かな

みなセキシアルな機微を擱んだ、な

やましい句ばかりで、川柳境地の開拓の

ひとつの傾向として惹きつけられてしま

つた。人間の弱さかともすれば支配され

易い人情を、主觀的に大膽に表現してゐ

るこの句に接して、かすかにも戯作気分

を江戸趣味に盛つた感じにうたれたのは

たまの日曜を太陽に抱かれたり
 愛は冷え生の執着ばかりなり
 大根賣厘といふ字の尊とけれ
 子供等に勝つて淋しく机に居
 真黒に寫すカメラを持ち歩き
 チラリツと男心を射た金齒
 腰かけてメニユーへ二つ顔が寄り
 繼母が派手に騒いでゐる家出
 自我慾の悲惨頭をかゝえて寝
 子の出来ぬ妻の手相も見てもらひ
 愛憎の心の底にある刃物
 女性美は忘れ婦權を叫んでゐる

懷舊——長門峽探勝

松江 同 六郎
 岡山 同 雀子朗
 神戸 同 冷樓
 三重 同 迂均
 大阪 同 たけを
 松江 同 法泉子
 大阪 同 柳次
 同 比左夫
 同 同
 同 利生

も見渡される一幅の繪圖を思ひ浮べる
 ことが出来たし、第二句からは「藝姑射
 秘言」の、夫に後れたなまめかしい今源
 内侍が、一族のうちから養育すべく引取
 った揚卷の髪のを可愛らしい男の子を、夜
 伽のたよりにしつらへて行く描寫の、白
 きいだちの寝顔を、また「柳樽」のはな
 鼻をばつたりと置く夜の音」をふつと頭
 にひらめかしたことだし、第三句からは
 摩耶火君の「妻の起きた後の枕を抱いて
 みた」と「情の日數かさなるを房附の枕
 より外に知る者もなかりしに」「世間娘容
 氣」とを考へ合す私ではあつた。かく生
 來の邪道がましい想ひをいかざわしくも
 逞しうすることに於て、作者蒼太君は或
 ひはこの不眞面目な態度を難するかも知
 れない。とにかくありふれた、接しあい
 た句のなかから見出す霹靂は、私をしめ
 望ましくも想像の天地に舞ひ舞はせ、拭
 ふすべもなきヴェールのなかの自分を夢
 ごちのまゝ酔はしめた。そしてその想
 ひを走らすのみによつて、せめてもの慰
 めとするいちらしいといへばいちらしい
 情ないといへば情ない自分自身をのがす
 まいと涙つほくなつて行つた。

(昭和七・十二・八)

八東支部雜記

廣江天痴人

八東支部は今燃えてゐる。燃料が何時
 迄續くか心配される。亂笑、舍行、茜草

氣紛れの戀も知つてゐるアスファルト
往診の蔭へ小さく妻のゐる
くびきりに子のあることは役立たず

卒業生諸君に

渾名でもせめて覚えて居てくれよ
風 吐へ力を入れてみる
外交の淋しき靴へ水が泌み
一馬力かける氣夜を早く寝る
附合ひの悔みを申すに扇子持ち
孝行な異性を知らぬ娘と暮し
大學に出せと養子に望まれる
身を護る爲の沈黙者となりぬ
また働けと湯たんぼは冷えてくる
泣きの一手で母親落す女の子
後家と云ふひがみもあつて子を守り
この部屋の明るさにある裸婦の像
着飾つた女不覺に噓が出
組の四み主人は職がなし
大門を覗けば名札女にて
飲んで歸れば來てる恩人

大和	同	同	大和	堺	大阪	松江	大阪	小松	同
翠	同	青	同	夜	同	多	同	慈	雨
來	人	生	鬼	無	同	冬	同	北	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
え	い	を	し	と	し	し	し	し	し

女の三兄妹が揃つて川柳に精進してゐる
川柳家庭化の朗なサンプルだ。この兄弟
の長兄に版畫の平塚運一氏がある。川柳
雑誌の表紙に何か書いて貰つたらと思ふ
法泉子は支部のモーターだ。山口高商出
身で今聯隊區司令部に雇はれてゐる近頃
六郎と共に中耳炎を煩つた。檣師も病臥
中だが大分朗になつたらしい。早く良くな
れと一同念じてをる。六郎は三月早々
ババとなつた。満と名付けて愛撫してを
る。青波は今年兵隊になるのだからこれに
巧くならうと一生懸命作句してをる。青
年團でも評判がよい。鹿奈夫は若き理髮
店主人で獨身だ。大阪に好い候補者があ
つたら一人で好いから嫁様を世話してほ
しく思つとるのは私ばかりではないらしい。
遊星はM郵便局に移めてをり愛弟が
軍曹として北滿で活動中なので毎朝氏神
へ武運長久を祈つてをる。皆笑ふことの
好きな連中ばかりで近頃天痴人は腹の皮
を痛め仁丹を飲んでゐる。四月中旬には
松江支部と合同で郊外の花見のやうと云
ふ話が今からはづんでをる。(三・一五)

加古川訪問記

生田 翠 夢

二月の支部行脚を加古川支部と定めて
幹事光哉君と交渉の上、二月十九日に訪
づれる事になつた。當日朝十一時の汽車
に遅れて、電報を打ち、次の列車に乘る
可く愉快と家を出た。交通の赤燈に幾度

仲のよい夫婦で戸籍二つ立て
 金鑛へ遙々博士伴はれ
 小作人勝つた爭議へ迫る冬
 金などなつかしがらす生みの親
 流言地今日ももうけた事ばかり
 ハンドバツクに多倅なる哉プロマイド
 解消の何んの彼んのと薄倅せ
 颯爽と傍目も振らず銀狐
 轉宅の荷物語る生活苦
 救はれたとはいつはりも程がある
 ビストルのひびきとなりし自尊心
 夫婦して足袋をはかしてつかれてる
 女房は手のあれを見て春をまち
 春惜しむ夜のラデオへ若夫婦
 あの頃はすでに故郷へ去なぬとこ
 耳を疑つて行商歩き出し
 忙しさについ命日も忘れ勝
 出勤の時刻子供に邪魔をされ
 はがゆくもまゝにならないガラス越し
 かけとりにのますコーヒを一ついひ

長野 大阪 同 同 同 金澤 大阪 松江 島取 八幡 暨池 松江 大阪 同

同 柳 同 正 同 沐 同 小 同 旭 同 白 同 砂 同 湖 十 松 祥 小 裸
 七 詩 朗 蝶 詩 園 天 路 兒
 人 舟 月 雨 八 山 朗 蝶 詩 園 天 路 兒

か邪魔をされて、車が大坂驛についたとき目指す列車は、黒煙を残してホームを離れるところだ、素早く阪急で追跡の決心して、電車で上筒井へ、それから直ぐに兵庫驛へタクシーを飛ばす。スピードを出してくれたが、驛の手前の高架を目的の列車が轟然と走つてゐるではないかこの時程正確な我が鐵道局のダイヤルの心憎い事はなかつた。
 神姫電車で明石迄、驛前の食堂で晝の仕度を済まして次の列車で加古川へ着く。驛の出口に加古川支部の方が加古川支部の標を立て、出迎へて呉れた。初対面とは云へど別にそんな感じもなく、舊知の如く話しが出来て、道々遅刻の御詫びやら話をしながら、會場へ向つた。思つたより繁華な街々を通つて、會場たる光哉子の宅に着いた。
 泰山、光哉、督三、美也光、の諸君百%の出席、大阪柳界の話、本社の話、路郎先生の動勢等々盡きない、話題は句會を延ばす事數時間、やつと七時に句會を済ます。腹が北山しぐれだ。
 程なく酒肴が出て亦一しきり話が飛ぶ自分は川柳社界進出の一步として地方新聞の柳壇獲得を進めて、暇乞する事にした。未だ早いものゝ處、もうなんと十二時を過ぎてゐる。兎に角驛へ向つた。加古川町は人口二萬餘にして約四十五ある。云ふ話誠に相當なものぢやないですか。一時すぎの汽車で歸阪の途につき見送

酒のんで陽氣な吾れの膝がしら
道頓堀で物のあはれを見てかへり
人、人に小言が遠ふなさけなし
空は星下はルンペン餌をあさり
人形を香具師なか／＼に動かさず
友として妄言だ眼鏡拭き給へ
腕組めば愚かな自己を知るばかり
片戀の手袋の先冷たくて
その日にも風でゐたゞる鯛の骨
怒つてゐる様に霞は屋根をうち
二月の陽は遊ぶ子を置去りぬ
鳥居から祖父の面影思ひ出し
堪忍の二字を代書の壁に見る
ロボットにしても油はいるんだぞ
思案にはあらず重役晝寝なり
想出の一つ煙草の煙となり
ケーブルに峠淋しく見下され
朝といふ氣持へすゝめ一羽二羽
貧乏は覺悟夫を信じて居
ふくれたり女々しい君になりしよ

同 武川 大阪 京都 大阪 同 東京 石川 大阪 同 同 同 同 同 今治 伊豫 大阪 京都 大阪 同 中

紫 遊 四 麗 政 朴 白 萬 窮 柳 文 詩 一 曉 芳 三 阿 白 方 耕
五 太 丘 太 五
山 步 磨 光 郎 甫 土 保 巢 郎 蝶 郎 騎 童 岸 郎 鴻 菊 眠 朗

られし同人四氏に春亦逢ふ約束をして袂を分つた。
心地よい句會の氣持に酔ふて感激の夢さめぬ身が車窓に明滅する深夜の村、町の灯を眺めつゝ、年より老けた洒落の名人泰山子、同業光哉子の若々しい顔、詩人らしい感覺をもつた督二子の風貌、默々として何物かを把握してゐる美也光子等が、眼前に往來して眼底に強く／＼印記された。
追記 微力な自分の刺激によつて今度加古川吟社では菊版型の機關紙を出される事となつた。同人、社友及び誌友諸子の御後援を何卒御願ひします。

窓のない部屋

澄田 羅門

百姓はマスクを知らず靴をしらす
日な／＼哀しき汗と疲勞を敢へて
一家を守らねばならぬ
搾取されて奪はれて押し倒されて叩きつけられて踏みにぢられて私達はひからびるおゝ、陰慘なる怨恨の毒ガス

手應があつたか女編んでくれ
 大都會一步踏むなり拘摸にあひ
 處女の面影今いづこ犬とゆく
 疑つて聞けば癡兵義足なり
 襖一重よい相談に狹まれて
 脱衣場心のまゝに脱がれてゐる
 悪友の一人結婚してしまひ
 榮轉の衿のあたりにある誇り
 相談があり邪魔になるジャズバンド
 しやべりたくない日彼女の文が来る
 春の灯に夫へ拗ねて見たくなり
 子供さへ無ければと云ふ女性なり
 年賀狀悲憤懣懣のも來て居
 スピードへ把手調子をそろへ出し
 勝氣又算盤持つて店に出る
 黄昏に記念寫眞のあはてやう
 無造作に髪を伸して失業す
 瀬戸火鉢妹の爪美しい
 貧乏を苦にせぬ顔に瘦が見え
 更生の明日へ宵寝が續くなり

石川 登ヶ池 大坂 登ヶ池 大坂 石川 大坂 今治 大坂 京都 大和 神戶 高松 島根 大坂 同 松江 京都 大阪 石川

白花子 一馬 春光 清香 佐美 美松 青米 紫陽 冬光 波樓 白帝 春信 柳夢 夢人 良佑 笛秀 青波 白史 三陽 北子

足の爪先まで感覺を失ひ
 指は默念と土を弾き
 つめたき
 唇にたまる雪をなめて
 忠實な
 宿命的に
 土をまもらねばならぬ百姓の私だ
 家にかへれば
 暗く、煤けた
 柱がにぶく光つてゐる
 杜時計が疲れてゐる
 享樂と權威を
 ほしいまゝにする人々
 肥車をひいて見なさい
 あをぞら
 私、私の生活は
 青空が糧だ
 けれども
 暗き日輪である
 逆さな睫毛はくらき光りである
 私は歪められた人間である
 私の川柳は
 嘘だ
 血球が歪んで
 視力がにぶく
 私のは何をみた
 私のは
 嘘だ

三輪車母に先んじ又遅れ
病床の姿が浮ぶ一七日
賃金が下つた儘で忙しい
賣られ行く牛へ雲低く垂れる朝
寢臺の下に疲れし妻の呼吸
冬よりも貧乏が寒いのだと云ひ
プチブルの意識のなかに生きし我
手内職鼻をすゝつて返事する
工場に舊友黝い顔で居り
感情がボストの底へ従いて落ち
白き溜息ベビーカーレンダージュする
叱られた教師から来る見舞状
サイドカー子供をのして真面目なり
卑屈する暮し自嘲の日がつゞき
吐く呼吸は山に應へて歸り来る
半分は女に着せる夜のマント
まゝごとの客にせらるゝ妻若し
踏切で話を替へた二人連
金塊の音する方へ耳を貸し
酔うて歸れば母の寫真がにらんで居

愛媛 大坂 同 京都 大阪 同 同 同 神戸 大阪 神戸 京都 松江 神戸 大阪 島根 石川 岡山 大坂 同 京都

紫雲 一雄 富士 昌一 有碍 吳竹 洋々 吉右 いの左 秋彦 蜂朗 榮吉 幸捐 馬骨 海月 醉羊 素木 いを 岩わ 富美 三石

あゝ、あさぞらに
風船をはなしたやうな
あかるき
弾力がほしい

春

中野 裸人

冬の寒さも彼岸までと云ふか、奈良の
お水取も済んでお彼岸が来ると、めつ
つりてゐた身体や心が急に寒さびりとし
知らず、ねむ気がさしてくる惱ましい
田舎へ行くとき、つてゐるやれんげや菜
の花が一面に咲き、つてゐるやれんげや
ひばりが、さえずつて、時々は、都春は
るい風が、我々の皮膚をなで、都春は
到底、美味いもの、出ない、野や山を
景に、美し、都春は、野や山を、
郊外へ、と、出かけて、野や山を、
私、この、小い、校へ、通つて、五、六、
思、友、の、の、道、を、歩、き、
××さんの嫁さん何時来るか、三月櫻の咲く
頃、に、腰、巻、き、一、つ、で、と、ん、で、来、る、
な、事、を、大、き、な、聲、で、歌、ひ、
を、思、ひ、出、し、て、は、一、種、不、思、議、な、氣、持、ち、に、襲、
は、る、の、意、味、は、「お、前、の、様、な、貧、乏、
人、に、論、議、の、意、味、は、一、種、不、思、議、な、氣、持、ち、に、襲、
て、居、る、の、意、味、は、一、種、不、思、議、な、氣、持、ち、に、襲、
より、貰、へ、な、い」と、云、ふ、事、を、非、常、に、相、手、を、

穴のある股引二度に足を入れ
 よき母と兄と彼女があつて病み
 たよりなき兄の姿に涙する
 此の内に伴が勤むビルディング
 美まれさげすまれたる酔ひつづ
 かげ膳の湯氣に氣づかふ親心
 借用の徳利も出して新世帯
 魚屋は出双で女房を差しまねき
 ビルディング給仕ばかりの聲で
 巡業の先々見つめ朽ちて行く
 本當に疲れて女給無言なり
 呑めもしないアルコールがある枕も
 カクテルへ袖が長い短かいの
 えりあかの廣さ背中にすゝる鼻
 大自然足下に蹴つてデアンピング
 出戻りの乳が張り切る月の暈
 ふと嚙んだ草の甘さに春を知り
 フランス人形壁につるしあり喫茶店
 軒店の親父凄いのを圍つてゐ

東京 大阪 京都 山口 京都 大阪 東京 同 同 同 大 島 大 東
 阪 阪 都 口 都 阪 京 同 同 同 阪 根 阪 京

九 夏 盲 月 玉 新 玲 ゆ 啞 悲 涎 ひ 雷 正 野 鐘 華 葉 朧
 文 市 き さ
 錢 光 々 茶 兒 街 人 ら 人 虎 湖 し 兒 三 郎 生 村 光

嘲笑して云つた言葉には、
 は、生れ、たが、面白、遙、か、早、は、
 ら、本、當、に、腰、巻、き、元、に、早、は、
 へ、本、當、に、腰、巻、き、元、に、早、は、
 花、本、當、に、腰、巻、き、元、に、早、は、
 を、横、切、つ、て、有、様、の、想、事、を、
 入、つ、て、有、様、の、想、事、を、
 私、を、一、つ、て、有、様、の、想、事、を、
 娘、に、一、つ、て、有、様、の、想、事、を、
 様、に、一、つ、て、有、様、の、想、事、を、
 だ、に、一、つ、て、有、様、の、想、事、を、
 田、に、一、つ、て、有、様、の、想、事、を、
 美、に、一、つ、て、有、様、の、想、事、を、
 紅、に、一、つ、て、有、様、の、想、事、を、
 有、に、一、つ、て、有、様、の、想、事、を、
 都、に、一、つ、て、有、様、の、想、事、を、
 唯、に、一、つ、て、有、様、の、想、事、を、
 依、に、一、つ、て、有、様、の、想、事、を、
 な、に、一、つ、て、有、様、の、想、事、を、
 的、に、一、つ、て、有、様、の、想、事、を、
 を、に、一、つ、て、有、様、の、想、事、を、
 が、に、一、つ、て、有、様、の、想、事、を、
 年、に、一、つ、て、有、様、の、想、事、を、
 惱、に、一、つ、て、有、様、の、想、事、を、



作爲といふ事に就て

松 盛 琴 人

作句上に作爲と云ふ言葉がある。若し此言葉を作品の上に投げかけられると、それは作品の致命傷になる。即ち其句は「つまらないもの」だと没にされる恐れがあるからだ。で何故「つまらない」のであるかと言へば、大抵の答は眞實の力に乏しい爲、形の上に作爲がはたらき、つまり「作りもの」といふ臭味が残るからだ。それは空虚、偽物、不自然等々の言葉でも代言される。

併し年數を経ひ作句に注意深い作家なら、それは無からふが未だ川柳に日の浅い人は、よくそれで失敗する、然も簡單にさう言切られた丈けでは概念は解つた様でも「作爲」とは、どんな臭味か今一ツ詳細に其正體が掴めない。其處で理窟を付けて考へる。例へば、如何なる川柳でも「作らない」處に、川柳は生れない。それにも不拘「作つたのでは」不可ないと云ふは譯が解らぬ。必然的な意味から「川柳」は正しく「作つた」もので「自然」そのまゝでは、ないではないかと。全く其通り、作品は作つたものに相違ないが、それは一を知つて、二のあることに、考へ及ばさぬからで、川柳に日が浅いゆへの迷ひなのである、これを此邊の知識に止めておくのは、作句上大切な問題であるから、尙深く正しく之を理解しておく必要がある。

そこで手取早く、どうすれば作つたものか、「作爲」の臭味を除去する事が、出来るかといふ問題に觸れながら、少しく作爲の實相を、手近の句を、手當り次第に拾つて、例句として語つて見る。

つまらない川柳の代表句

傘借りて濡れずに濟んだ春の雨
非常時も祭は祭盆は盆
足の豆びつこを曳いて痛いなり

と云つた調子のもので、これ等は言ふ迄もなく、川柳と申上げるには、甚だ粗末過ぎるもので、所謂「そうですか川柳」燃焼不足、或は川柳の形だけが出来てゐる拙い作り物でしかない、併し次の如きは實に立派な川柳らしくして、然も作爲の跡歴然たるもの

疊屋は馴れた手付の肘でしめ
頂上と裾野を富士は雲で分け
曲者の背後に光る刑事の眼
歡迎の名士へ驛のこんである

等々、斯ふした句は、一寸見には如何にも川柳らしい川柳で、然も中味はカラツボの句で、こんなのは随分ある、之等は作爲

の失敗に關心を持たずに、不識々々の内に作句するから、こんなのが出来るので、相當年數を経た作家でも、折々この失敗を繰返す。

以上作爲の點で警戒すべき句に對して、優れた川柳を二三句採つて比較してみる。

君見たまへ渡菰草が伸びてゐる 路 郎

ハモニカ回春の子の枕許 同 二

悲しみの光のごとく雪が降る 山 雨

赤松のみどりか 僕を生んだ村 半 文

四疊半、三疊、父と子の冬を分つ 日 車

凡人となれ一ツすて二ツすて 尺 蠅

新作舊作が混つてゐるが、兎に角是等の句に一方の句を比較すれば、直ぐ其優劣は判斷が出来るであらふ。一方は同じ作物でも「つまらないもの」か或は「拵へもの」といふ感じが濃厚で少し川柳をやる人なら決して上等なものとは思ふまい。然るに此句はそうした臭味もなく、一寸詠み下した丈けでも、ビーンと心の琴線に觸れる、何ものかである。

此相違點が直ちに其句の詩價値を定める分岐點でもあり、「作爲」の有無の實相である。それなら、何故にさうした結果が生じるか……といふ事を、よい方の句の例で言ふなら、

最もよく「作られたもの」「作り物」といふ臭味を残さず、反て内部より生れた、純粹自然な感じが、句の上に躍動するからであると言ひ得る。要するに其作爲が充分に必然であるので魂と形とが、ピタリと一句内に溶合しきるため、「作爲」なるものが目に止らず、只だ其處には渾然とした、一つの自然美さう云つた、一つの「美」の形だけが、光輝を發散させるからである。

藝術は魂が打込まれねば駄目だとは此邊の消息で、例へば昔

吃又といふ繪師が、人形を描いたら、それが抜け出たといふ。又左甚五郎の木刻の龍は、夜な／＼水を呑みに出かけたといふ歌道に電小町あり、俳道に其角の三圍の句がある。講談物によく出る話で、それは空事であるにしても、物事修業が積んで其作物に渾身の力を込めて打込めば、其位の事は有つてよいので、川柳にしても、作つたものに作爲の跡も認められない程になれば、其句は大方良い句とされる、然も作者の魂が打込まれてゐるなら、勿論優れた川柳として、何人の心へも響く迫力を持つは當然であらう。

斯ふ言ふと川柳は大變難かしい、然り川柳は難かしいものと敢て言ふ、入り易き道ほど奥深いものである。だが吃又、甚五郎が、如何に天才家であつても、矢張り人間なので、彼等とて生れながらの名人ではない、刻苦精勵血の出る修業が、彼等を大にしたので妙技も振ひ得た。蘊奥は努めすしてさう易々と意得出来るものではない。さればこそ名人はざらにないので、吾が柳界に於ても、今年の文藝春秋新年號で、古今百名句を撰んだが、現代の名句としては、僅かに數句を並べたに過ぎなかつた、あれが正しい現代川柳界の眞相だとすれば、名ある川柳作家も多のに不拘、餘りにも情けないと、言はねばならぬ、故に吾人はあれに對しては、ノーと呼びたいが、先づそれよりもあれが本當として考へねばなるまい。何故なら立派な川柳は、一生に一句出来れば、大成功の内であるといふ意味に於て、「一句を残せ」といふ言葉で、主幹路郎先生が教へてゐる。

吾人は濱の眞砂の中から、其一粒のダイヤを探し求めてゐるのである、されば作品の上に作爲の臭味を減して、立派な川柳として、吾が作品に魂の光りを發揮せしむる事に、精進しなければならぬと、作爲を説いて自からの心に、言ひ聞かせたのである。(三・一六)



硝子の室

— 僕の勝手な愚話室 —

住田 亂 耽

三方が硝子の室に、春の光を浴びて、泛び出て来るくさくさを一くさりつゝ纏め、題して硝子の室と言ふ。が周囲の硝子は破れた所はそのまゝで、又一度だつて拭かれた事を知らぬ、ごんより曇つたものだからこの一文も不透明なもので終るだらう。

人間が頭髮を伸ばす事は、人間の最も大切な部分をより充分に保護しやうとする自然の本能だらう。

數年前、何かでひどく頭を打つた時に長髪にしてゐたお蔭で瘤を少し出したのみで済んだが、この時には沁々と長髪の有難さと思つた。若し丸刈にでもしたら少しは頭の皮膚を傷けてゐたと思ふ大げさな日本語で言へばさしづめ頭を割つたと言ふ所である。日本語は時々嬉しい迄に誇張法を使ふ言語で、頭部に血が滲む程度の僅かな傷でも、頭を割つたと

か割られたとか簡単に言ひのける。

相當僕が物心つく年になる迄「頭を割られた」などといふ言葉を聞くと、人間様の頭が柘榴の實がぼかつと割れたやうになる光景を想像したものであるが、先程述べた如く一寸した傷にでも言ふ事を知つて、日本語の誇張性に呆れると同時に、自分の餘りの無智さを心の中で嗤殺した事を覚えてゐる。

さる昔、たとへば男伊達と男伊達との小さなでいりでもよい、頭を猛烈にやられて、柘榴のやうになつた事から「頭を割られた」と言ふ言葉が生れたものであらうと勝手に想像してゐる。

△

酒で名高い灘に生れ現在までそこで育つて來た僕は、運送業と言ふ商賣柄、四六時中無數の酒樽を見飽いてその日その

日を送つてゐる。酒好きの人には、美しい話かも知れぬが、酒を餘り好まぬ僕には、酒樽には何等の感興も湧かない。

酒樽は只冷たい貨物としか僕の眼に映らず、まして飲慾なんか少しも起らぬ。

「酒を割る」といふ言葉がある。之は酒に水を入れるといふ意味もあるが、僕らの仲間では、酒樽を破損するといふ譯になる。

トラツク、馬車、あるひは小車の積卸しの時に、誤つて之を大地に落すとかして酒樽を破損した時に酒を割つたといふのである。何がはかないと言つても、實入の酒樽の鏡が抜けて、高い税金のかゝつた黄金の水が大地に涙を流す程はかない見物はない。経験のある方もあらうが酒樽を落した場合、片方の鏡が飛ぶと、必ず物理的作用によつて、片方の鏡も抜けてしまふ。落ちた音と共に、一立一圓に近い酒が七十五立も一瞬にして、かなりの地面に悲しみの地圖を描き出すのである。

何故の悲しみの地圖か。酒を割つたも

のは、僅かな運賃で之を扱つてゐても、辨金は相當せねばならないのだから、實際こんな粗忽をした者は、四斗樽程も心の底で涙を流すのである。だから地球が酒をのむと言ふ雄壯なシーンも、粗忽の當事者には、全く高價な涙で呆然手をつくねて、實にボカンと傍觀してゐる以外何の手段も餘裕もないのである。

こんな時に酒造業の番頭あるひは主人に、頭を低ふして謝罪しに行く所謂親方といふ僕の商賣も亦つらい哉である。

此方の言ふ事はいつも決つてゐる。

「とんだ粗忽いたしました。何分働き人の事ですから、どうぞ御寛大な處置をお願い致します。」

この一手の活版すりである。すると皮肉な人になると

「よく貰ふてくれましたなあ。うちは何處へ賣るのも同じやから。どうも有難う」

と頭から得意先扱ひに柔かく言はれる。之には手も足も出ないのである。又短氣な人には

「割つた破片を拾ふて来い。」

と怒鳴られてしまふが、こんな叱られ方

は却つて痛快である。酒の破片を拾ふて来いなどは、全くその時の僕にとつて涙のナンセンスのコンデンス以外の何物でもないのだ。で酒を割つたと言ふ言葉を聞くと、私は首筋がひんやりするのを覺える。

△

頭を割るとか、酒を割るとか言ふ言葉は兎に角餘りいゝ印象を齎すものでない同じ割るといふ語でも、はなはすかしき女性の方へ持つて行くと、甚だエロツぱい感じを起させる。之は一體どんな事か讀者諸君が、ほしいまゝに想像出來てもうこゝで書けば徵苦笑一つで諒解して戴ける事を知つてゐる僕は、くだ／＼この説明をする愚を取へてしない。言葉といふものは、使ひ方でなく／＼味ひのある面白いものだ。

△

愚陀が川柳に手を染めた年の極月卅一日に、僕は頭髮を伸し初めた。だから後年一體何時頃から長髪にしたかを知るには、川柳雜誌の合本を繕けば直ぐ判るので、その度に必ず僕はある童顔の愚陀を

懐しく思ひ起すに違ひない。

僕の性格が半面はストリートで、半面は複雑なカーブを有する事を裏書するかの如く、僕の頭髮は右半分が素直で、左半分は全く癖が悪く、アイロンの助力を仰ふがねば、整然としない甚だ厄介なものである。

祖父の代から行きつけの散髪屋A軒にアイロンの設備がないと思ひこむでゐた僕は、暫く外の理髪師の厄介になつた。所が相手は小さい町に古くからやつてゐるといふなか／＼の古強者で、そのブラツクリストには何月何日に誰が來ると言ふ事は大体もう記載済なのだ。

いはゞ、選挙地盤のやうなもので僕の家はそここの固い一票になりきつてゐたのである。

何軒も同業が殖へて競争が激しい時代だから、僕一人でも決つた得意は大切なものらしく、緊張した面持で、そこのおかみさんが、僕の家へ戸別訪問にやつて來たのである。

「おうちの御主人どこか悪いのと違ひますか。此頃薩張りお顔が見えませんが」

と病氣見舞の名に於て氣勢をうかゞひに來たのだからたまらない。親類でも近所でもない散髪屋が達者で困つてゐる人間の見舞に來てくれるのだから、田舎にもなか／＼人情味のある皮肉が漂つてゐるこの女性の戸別訪問によつて、之れ亦必然的に女性である僕の母は非常に氣の毒がると共に、その商賣の熱心さに動かされて之からはやはりそこへ散髪に行つて呉れと言ふのである。普選になつて戸別訪問が禁じられて違反になるのも宜なり矣と思つた。

それからずつと又僕はA軒の固い地盤になつてゐる。取扱ひもぐつと變つてサービスもなか／＼よく、皮肉にも黙つてアイロンさへかけてくれるのだから、却つて恐縮して尻こそばゆい事がある。

察する所、アイロンの件は、母がおかみさんに言つたものらしい。

△

散髪は、盆栽趣味の一つの變身だと思ふ。色々に髪をとのへて、人を良い心持にして歸す理髪業は綺麗な商賣だ。缺の音の下で、植木師にあの長い缺で

刈られてゐる松の木の氣持も多分こんなものであらうと思ひながら、快い居眠りを斷續的にむさばる境地は僕にとつて一つの極樂だ。散髪屋を出てまちの風に頭をひんやり冷す氣持も亦捨て難い。

葉刈りしられた松の木が風に吹かれて明朗な空を仰いで立つてゐる氣持も僕にはわかる氣がする。

然し下剃に喉を剃られる時は、ふいと自分が死のすぐ隣りの國に居るやうな無氣味な、氣持を抱かせられる。

上司小劍の小説の中に、お妾に戀を感じた下剃が、そのパトロンの顎を剃る時の微妙な氣持の動きが、細かに描かれたものがあるが、こんな時海野夢一佛氏の句、

顎を剃る時下剃の顔を見る

をいゝ句だなあと想ひ浮べる。

何處の理髪師も表に得體の知れぬアメンボウを色々の形で出してゐるが、ずつと以前あの起源が何處から來たか判らぬといふ事をかいたものを讀むだ覺へがあるが、今でもあのアメンボウの起源はやはり不明なのだらうか。

△

この散髪屋のアメンボウから川柳家の故近藤飴ン坊を想ひ出す事は、故人の靈に失禮に當るかも知れぬが、貢獻する所の多かつた氏に逝かれた柳壇は一つの異彩を失つた淋しさがあるであらう。惜しい事である。

氏からは三度だけ手紙を貰つた記憶がある。然し筆不精な私は一度も返事を出さずにゐた事を今深く心に愧ぢてゐる。

ずつと以前川柳三味誌上で、僕の句

會社との折合ひつかず家鴨なく

を、飴ン坊氏自身の句

イン壹幾何を忘れて一ト昔

の句と同巧異曲で、好きな句であるとして氏に持ち上げて貰つた事があるが、その時別にわざ／＼激勵の葉書を貰つて、良いおちさんだと思つた事もある。その後、氏が句集を出した折、それに掲載せられてある僕の句を並べて、こんなものを出したからといふ意味の葉書をもらつたがこの時に又別な飴ン坊さんを知つた譯である。

それから一度「むさしの」は句を送つ

てくれといふ簡単な手紙を貰つたが、飴ン坊さんもなかくお世話だと思つて句だけは直ぐ送つて、今までの埋め合せに僕自身の心の債務を果した事を覚えてゐる。

飴ン坊氏とは、之だけしか交渉がなかつたが、勿論句會でも一回も會はなかつたかし。——なつかしい東京のおぢさんといふ氣は絶えず持つてゐた。

親子程年が違つてゐても、つきあへるし、又全然未知の人から、只川柳家なるが故に手紙をいたゞく事が出来るのだ。川柳家も思へば變つた人種だ。結構な人種だ。

△

川柳家が結構な人種だといふ事に就いても少しづつづける。私が近頃嬉しい手紙を貰つた事をここに紹介する（この手紙の筆者よ、無斷でここに君の手紙をかゝける事を許し給へ。）」

——前略——今朝南海難波驛の書物賣店でふと川柳雑誌を手にとってみると、巻頭に路郎先生の「僕は今」の奥書に……逝ける愚陀に……とあつたので、アツと思つた。僕は直ぐに川柳誌を買求めて了つた。

今日も僕の體は随分忙しいのだ。然し僕は其の雑誌を手にして地下室のフルーツパーラーへ行つて、そこで君の「噫愚陀」も町二といふ人の「愚陀君を悼む」の一文もその他凡そ伊藤君に關するものを探求するやうに讀むだ。さうして彼の死を今迄知らなかつたことの不明を恥入るやうな氣分になられて來た。彼がまだ生きて物をいつてゐるやうな幻想も描かれるのであつた。そうしてもうぢつとしてゐられなくなつてこれを見給へ。一階の賣場で十錢均一の原稿用紙と、同じ十錢均一の封筒を買つて、今度は七階の食堂へ上つて、いまこれを書いてゐるのだよ。二月號の川柳誌を三月一日に手にしても、誰も知らせてくれなかつたけれ共僕はあの天才詩人の死を知る事が出来たのは、やはり詩の魅力だと思はれる。

あの丸々と肥つた、そしてガツチリとした骨ぐみのスポーツマンの愚陀君が逝つて了ふなんてことはどう考へても嘘としが思はれない事だ。悲しいといはうか惜しいといふか、僕は僕らの知る限りの中の一つの大きな損失を來したのだ。哀悼の言葉の月並な悲しみ方ではあき足りない痛切な心持で一べいだ。

それにしても君は實にヒドイ、ケシカラ

——中略——君には年賀狀だつてやつてある。愚陀の逝つたのは去年ぢやないかなぞ知らせてはくれなんだのだ。うらみに思ひ置く。その罪の代りに愚陀の墓参につれてつてくれ。

この筆者は麻雀界の理論家で、川柳もしばらくやつてゐて、僕や愚陀の句に大いに共鳴してゐてくれた僕らの兄貴分である。

非常な情熱家である事も、この手紙を一讀して背けるであらう。僕は年賀狀を貰つたのだが、その後久しく合はなかつたし住所も「住吉島浦園」としかなかつたので、例の筆不精も手傳つて心ならずも返事も出さず、又愚陀の死去も報せず終つた。然し愚陀は此の手紙を見てさぞや地下で喜んでゐる事だらうと思ふ。

僕は早速お詫びと、一度是非會ひたいといふ手紙を出したが、未だに何の返事も來ない。もうこちらでこの手紙の筆者の名を出さう。素心といふ男である。

素心よ。君が僕に對して、年賀狀を寄越さない事を腹立しく思つてゐたであらうやうに今、僕は君から何の返事もないのうら悲しく腹立しく、さへも感じる。再び素心よ。居所をはつきり知らせてくれ。

だんだら模様

長 野 吉 高

あけてみる

武玉川を見ると、あれは讀み馴れぬ私の罪だらうが、あて字や誤字が多くて大變に眼障りになるのがある。武玉川はあれはあれで、異色のものとして許されもし、通つてもあるのだらうが、不案内な私どもには甚だ合點がゆきかねる。勿論そこには何かの理由があることゝは思ふ

○

内容さへよければ、形式なんかどうでもよい、とは一應の理窟のやうではあるが、すべて短詩形のもの、原則としては極少の文字で思情を表現するものが生命である以上、形式が亂雑な爲めに其れが正確に理解出来なかつたり、不快な暗影を投げさすやうでは無意義である。和歌俳句、川柳、かうしたものは文字形式と内容との整備こそよけれ、でこれは誰が何んと理窟をこねやうと、駁論しやうと私の所信が正しい、とまア勝手な氣焰を

○ 散文でも、誤字やあて字があると(誤植でなく筆者の粗漏で)ひどく眼障りだ

若い連中に脚本を書かすと「縁」の字をよく「椽」と間違へる、とは額田さんの實感、ありさうな間違ひだ、何んの一字や二字の間違ひが、と大抵な人はバカにしてかゝるが、文筆をとる者が誤字やあて字を平氣で書くやうではとても見込みがない。「文藝をやる者は立派なものさへ書けば誤字を書かうと書くまいとそんなことはどうでもいふ」なんぞ云ふ者があるがこれはもつてのほかの暴言で、聞き捨てにならぬ放言だ。こんな者は、文藝を云々する資格さへ無い者である。誤解もこゝまでになると哀れで笑へない。尤も人間である以上、時には誤字やあて字を書かぬとも限らないが、たゞ述上の

やうな不心得な考へだけは捨てねばならないと思ふ。外國では、文學者が平氣で誤字やあて字を書くとか大變に輕蔑されるこれは當り前だ。が、外國なんぞどうでもよい。私どもは私どもで、お互に心すべきである。

○

私が惡筆だから、何も惡筆仲間のカタをもつのではないが、凡て字の上手下手こそ問題でない。要は明確に、誤字やあて字なく判り易く。とは言ふものの、ありやうは私など、よく誤字をやる。その時の頭の加減にもよるやうだが、一つには妙な癖のついた字があるやうだ。例へば、私が最もよく書き誤るのは河竹默阿彌である。河竹とまでは無難だが、「默阿彌」をよく「木阿彌」とやつづける。私がすつてんでんのモクアミだから、これが頭にこびりついて離れないのかも知れない。

○

川柳を社會的に進出せしめ、文藝的價値を向上さす、といふ事はよいことかも知れぬ。けれども、これは前途に相當の

困難が横はつてゐるのではないかと思ふ川柳に正しい理解をもつ人は、まだく、
少い。柳人同志だけの氣焰や景氣だけで安心してゐては、目的地に達せぬ間に日が暮れてしまふ。

○ 「さういふお前は川柳も作らずにゐて其れで理解があるのか」と一本參る人があるかも知れぬ。なる程、川柳も作らず川柳理論も知らぬやうな私ではあるが、川柳がピツタリと心に觸れてくるあの力に理窟以上の大きな魅惑を感じるのだ。例へば、演劇理論も學ばず脚本を作る法も知らないから、とて芝居を觀たつて解るまい、觀るなど言ふのと同じだ。

○ 川柳には色々な派があるやうで、それ／＼の領域を守つてゐるやうに思ふ。「皆んな一緒になれないのだらうか」と言つた人があるが、單純な笑へない言葉である。私だつてさう思ふ。だが、實際問題としてはさうウツカリとはゆかないものと見える。よいやうでもあり、悪い

やうでもある。これは丁度、今の文壇と劇文壇に似てゐる。この二つは、似たやうで實際はかなり離れてゐる。例へば、一口に文學者と言つても、全く小説に走る者と戯曲に走る者がある。尤も中には、小説を書いたり戯曲を書いたりする器用な連中があるが、事實上はやはり劇文學者と單な文學者とは別な立場にある女學生でも知つてゐるやうなポピュラな作家でも、餘程の名戯曲でも書いて持込まない限り、劇文壇では直接にはさして問題にされない。劇壇人で、全く無いことはなく時にはあるが「改造」や「文藝春秋」や「キング」級、さては婦人雜誌などに、さう／＼せり込むやうな者は少い。劇壇には劇壇のそれ／＼の規約と機關雜誌があるので、小説畑の人の原稿料は狙はない。尤も中には縦横に荒し廻す人もないではないけれど。

○ 川柳界だけに、統一總合を望むのは無理かも知れぬ。

甲にとつてはヘドが出さうな女でも、

乙にとつては夢中になることがあるやうに、甲が時に馬鹿にする柳句も、乙が禮讃する場合がある。會つて私が、名前はこゝで發表されぬが、文壇的に作家的能力の勝れた某が、ドイツへ行かない前に書きさる劇場で上演された脚本に就て、かなり遠慮なく批評してみたら某をめぐする一味の人々から挑戦されたことがある。劇場の機關で最初に私が公表した以上争ひは正面である。戦ひの爲めの戦ひ、一體他人の書いたものをそんなに青筋立て、泥試合して何になる、と思つてゐる所へ「今月も八百長喧嘩でめしを喰ひ」とこれは川柳のつもりだらうが、さる友人から茶化され、急に馬鹿々々しくなつて楯を引込めた事がある。川柳界に、泥試合の無いことを祈る。

お互が云ひ合ひこして日が長し

緑 雨

○ 緑雨氏と言へば、お正月には早速とご挨拶をいたゞいて恐縮した。眞の作品、仕事に對する熱、その地味な點、とかく

口達者な連中は口ほどにないものだ。私は縁雨氏のやうな鳴かず飛ばす型の人が好きだ。これは決してお世辭ではない。

○ 私は、筆を握る不幸をしみじみと思ふ。小人は璧を抱いてのみ罪があるのみでなく、筆を抱いて亦罪がある。生活の爲めに、無用の文を賣ることを思ふと憂鬱になる。

○ 支那金人、儒佛學者の李純甫、名は之

僕 山本三巴

◇ 文は人なり。川柳も人でなくては世間體が悪い。

◇ 長いこと怠つたと云ふより川柳を忘れて居た僕。その九分通りはその名も顔も知らぬ會業のなかで想を練る時却つて寂しさを味ひ、自宅獨居、健やからしい子の躰を聞いて、作句自讃するとき不思議

純、屏山居士と號したが、酒を好んでよく飲み、數月醒めぬことがあつたが、沉醉するも著作だけは廢せなかつたといふ。飲助は嫌ひだが屏山居士のやうな人には好感もてる。怪氣焰だけをあげる凡俗な飲助どもは、酒嫌ひな私には何よりも不快である。

○ 自分を確として信する時は、どうかすると宣傳と誤解されることがある。私などは、自分の仕事に對しては決してウヌ

議な賑やかさに身内の躍るをさへ難く感ず。——多數は勢力だ。同時に孤獨は權威だと云へる。

◇ 國際聯盟の認識不足に激怒したのは日本だ。大日本全國民中萬象に對して誤らぬ認識——すべての本體を狂ひなく正視し得る者果して幾人ある。

◇ 地球上の地獄相、毎日の新聞社會面の混亂圖繪、すべては金に對し子孫連綿の認識不足に因ると云ひ得る。佛徒の阿賭物と蔑みしカネのために今は男子の貞操すら賣られて了つた。

ボレでなく、また慢心でなく、何人にも一步も譲らぬ自尊をもつてゐる。これが單なるウヌボレや慢心では困るが、凡そ一の仕事に専念する者は、それ位の氣魄がなければ駄目だと思ふ。其暗に卑下することははない。十の力のある者は十だけの事をやればよい。すつ込んでゐることはない。單に向ふ見ず主義では困るが、確信することはドシ／＼と實行もし、筆を執る者は發表するのがよいと思ふ。柳人諸君に、この意氣を切に望む。

◇ 積上げた千兩箱のテツペンで正氣で山吹色の糞をたれ得る男にして始めて金を意のまゝに集散し得べく「これ小判に一つたひと晩て居れろ」と土下座して許らぬ悲鳴を上げる奴は運よく廻り會ふ二度目の小判にはその下敷になつて息引取る奴也。

◇ 人の思想に喰入る力もなき川柳は悲し。力さへあればそれが俳句でも川柳でもはたまた狂句と讀まれても更に介意の要なし。

◇ いたすらな文字遊戲なら婦女子に委

同	同		同		大		奉		神		養		魚					
					阪		天		戸		池		崎					
愛	ミ	同	同	公	同	同	茂	同	伊		同	松	同	茂	同	寒	同	吟
ワ									勢					も				
子	子			子		代		子				代		よ		子		女

—(35)—

肱・枕・艸・紙 (四) 梅

【三十五】

慶應の頃、駒込團子阪下町に住みたる
高の者の勘次といふ老人が、或る事件に
て、町奉行所に召喚され、白洲に出て役
人より、其方の妻の名は何と申すと訊問
されて、暫く思案の後、私は何時も、ば
ばあゝとのみ呼び居ります故、遂に名
を忘れました、と答へて、役人を苦笑せ
しめたりと云ふ。此れは本人の直話なり

【三十六】

西洋の帽子を被らざりし、江戸時代に
於ては、武士町人の別なく、老も弱きも
外出する時には、笠を被りたる者多かり
し。其笠には種々ありて、武士は菅笠、
塗笠、町人は菅笠を用ひ、文人墨客は、
竹を編みたる山形の笠を用ひ、棒手振は
三度笠、少年少女は竹を編みたる饅頭笠
を用ひたり。明治に到りて、帽子を被る
者多くなり、笠を被る者は、棒手振、勞
働者のみとなれり。少女の饅頭笠は、明
治廿二三年頃まで被りし者あり。

【三十七】

昔は八月十五夜と九月十三夜に、自宅
に於て米を粉に挽き、それを團子に作り
て、月前にそなへ近隣にも贈りたれど、
今は自宅に於て、此れを作るものは更に
無し。亦、昔は市中に團子屋多く有りて
有名の店も諸所に有りしが、今は餅屋に
於て團子を賣り、團子のみを賣る店は、
甚少くなりたり。向島の言問は、評判高
けれども、其味美ならず、谷中芋阪下の
羽二重團子は、其味稍美なり。

【三十八】

市中銭湯の男女混浴禁止令は、屢々發
布されたるも、勵行されざるものゝ如く
江戸の末期より、明治五年に到るまでは
市中の銭湯は、悉く混浴なりし。當時の
浴槽の構造は、今のものと大に異り、其
前面に石榴口といふもの有りて、湯槽の
中は晝猶暗く、人の顔をすら看えぬ程なり
しが、男女間の猥褻行為などの噂無かり
しは實に不思議といふ可し。明治五年十

一月、男女混浴を禁止されたる時、浴場
を男女に區別し、其中間に板羽目を造り
たれど、板羽目は名のみにて、荒き格子
の如きものなれば、男女の裸體姿は、雙
方より互に看えたり。其後、嚴重なる警
察令が屢々發布されて、今日の如く改造
されたるもの也。

【三十九】

明治の初年に、兎を飼養する事が流行
して、且に一頭一圓に買ひたるものが夕
には二圓に、五圓に買ひたるものが十圓
にも賣れる故に、東京市民等は、自己の
家業を放擲して、兎の賣買に熱中なし、
それが爲めに産を破る者も多くありて、
其弊甚しきに由り、東京府令を以て、
養兎一頭に、一圓の月税を課せられたり。
飼養者は此課税に驚き、兎を野山に放つ
も有り、穴庫の中に隠匿するも有り、亦
此兎を安價に買ひ入れ、それを屠りてし
めこ鍋と稱し、大道に出て賣る者もあり
たり。斯く養兎の流行したる後に、一時

萬年青が流行して、遽かに富を致せる豪
駝師も有りたり。

【四十】

人類の言語といふものは、萬代不易の
ものならずして、時世の推移と共に、變
化するものなれども、予の知れる、江戸
末期の言語を、明治時代の言語に較べれ
ば、甚大の相違あり。明治時代と昭和の
今日の言語とは、亦著しく相違する而已
ならず、多くの新造語と外國語とが、一
般に使用さるる事となりたり、而して漢
語の讀方の、紊亂せるもの尠からず、例
へば「鼓吹」を「こすゐ」「見聞」を「け
んぶん」「人選」を「じんせん」といふが
如し。此れを博士の稱號ある學者等まで
が、口にも語り文にも書く也。今後、言
語は一層變化し、且つ紊亂するならむ。

【四十一】

我が邦人は事物の上に、「お」亦は「お
ん」といふ、敬語を附けて呼ぶ癖ありて
其れが最近一層甚しくなれり。「互」とい
ふ語の如き、昔は女子のみがおの字を附
けて「おたがひ」といひ、男子は「たが
ひ」といひたるが、此頃は男子まで「お

互ひ」と、口にも云ひ文にも書く也。俗
語にも「互に看交す顔と顔」とは歌へど
「お互に看交す顔と顔」とは歌はず。

【四十二】

江戸末期の銭湯は、多く男女混浴なり
しが、下町には浴場を男女の區別したる
も有りし也。湯錢即入浴料は、當時大人
は八文、小兒は其半額なりしが、其後に
大人は十二文、小兒は六文に騰貴したり
亦、正月松の内と五節供の日には、浴客
は孰れもお捻りと稱して、湯錢の凡倍額
を紙に包みて持参せり。正月十六日七月
十六日には、三助の貰ひ湯と稱し、當日
收入の湯錢中より、燃料の代金を控除し
て、其殘額を三助の所得とする例なれば
人々は三助の爲に、此日は必ず入浴する
事としたり。

【四十三】

明治の初年、斷髮令が發布されたる時
東京人の大半は、速くも斷髮したれど、
多くの人の中にはこれを夷狄の風俗なり
とて、舊態を存する者も有りたり。其頃
の童謡に

「ざんざり天窓を叩いてみたら文明

開化の音がする」

明治三十五年の頃まで、淺草阿都川町
の横丁に、古風の髮結床が一軒ありしが
東京市内に於ては、此れより外に看たる
事無し。茲に可笑しきは、今の理髮店を
なほ髮結床と呼ぶ人の多き事なり。

【四十四】

昔の女子は、髪を結ふ時と、化粧をす
る時のみ鏡臺を使用して、其使用後は
直に戸棚などに入れ置きたり。偶々これ
を座敷に出し置く時は、切見世の女郎の
如しとて、他人は嘲笑したるものなるが
近頃は鏡臺を一の裝飾品の如く、床の間
の上、座敷の隅などに据え置くは少し可
笑しと思はる。昔の切見世女郎は、何時
も部屋の中に、鏡臺を据え置きたりとい
ふ。亦、明治の末頃より、女子が腮より
頸に懸けて、白粉を特に厚く塗る事がは
やりしが、此れは昔の切見世女郎の化粧
法なりとて、昔を知れる老人は、痛くこ
れを指彈したり。現代の女子等は、白粉
といふものは、只濃く塗りつくれば宜き
ものと思ひ居るが如し。

句を味ふ

— 前月の本誌より —

琴人二南・亂耽・華水

川柳塔より

二南提出

後添へ子供心の玩具見せ

新 水

二南……氏の境遇にして始めて作り得たもので、何時も乍らの父性愛の句のうま味に引きつけられます。いちらしい子供の一舉一動に新しい母たる人の、やさしい目がうるんで居るに違ひ無い。ほゝえましい情の句です。

琴人……華水君はごう思ひます。

華水……二南君の云はれた様に、氏の境遇に依つて作られた句で、その境遇を立派に表し得て居ると思ひます。

琴人……此の句は御兩氏のお説で盡されて居ると思ひます。新水氏が我が子に對する慈

愛の深さが此所に表れたので「子供心の玩具見せ」かう云ふ欄へ所は、うっかりして居ては捉へ得ない心境で立派な川柳です。

二南……境遇川柳の落入り易い感情の域を脱して、あたかも傍觀事の様な落着きさを見せて居るのが、たまらなく好きです。

川柳塔より

華水提出

母は子の頃を語りて父は留守

小柳子

華水……女として妻として、又母としてその幼い頃を子供に語つて居る心情及び場所をうまく表して居ると思ひます。この「子」は「娘」では無いでせうか。

琴人……此の「子」は矢張り「子」であらうと思ひます。幼い頃「そう云ふ意味で使つて居るので句の内容は、母が自分の子供に何か教訓的な意味を含んだ話でも語つて聞かせて居るのであらう。つまり賢母型の婦人をこゝに表して居るものゝ様に受け取れる。即ち「父は留守」と留めて静かな家庭を想像させるのでは無いでせうか。

二南……華水君の云はれた「娘」と云ふのはその母の話を聞いて居る子の事を指された

のでせう。私がこの句から受ける感じは父の留守の淋しさを、昔物語でまぎらせて居る母子の姿を詠つたものだと思ひます。この意味で話を聞いて居る娘と取る事は一層句を生かすものでせう。

華水……二南君の云はれた即ち話を聞いて居る子が男の子でも女の子でも、どちらでもよいと思ひます。勿論その子が娘であるならば琴人氏の云はれた教訓的な意味が、より強く響くと思ひます。つまりその母の娘時代を我が娘に語つて居るのでせう。それでこの「子」が「娘」であらうと思ふのです。

二南……今の「娘時代」と云ふ言葉で華水君の説がよく諒解されました。かうなると私はこの話を聞いて居る子は必ず女子ので無ければならぬと思ひます。それも年頃の娘でなければならぬと思ひますが、琴人氏はごう考へられます。

琴人……その様にこの句を解釋すれば、是非娘でなければなりません。が若しその様な句であるなら此句は、實に平凡なものとなります。今迄「そう云つた内容は随分云ひ古るされて居る。つまりその母が娘時代を語つて居ると云ふのであるが、この句は父と云ふ文字を使つて居る。若し以上の解釋であれば「母

と娘」と表現して好いわけである。それを「子」の字を用ひて「父は留守」と止めて居る。之を讀み下して、味つて見ると單に娘時代の話をして居ると云ふだけでない様に考へられ今少し深いものが、そこにある様に思ひます。

この句は先程二南氏が云はれた様に二機に取られる様なまざらわしい點がある。

二南……私等はあまりむつかしく考へ過ぎて居るのでは無いでせうか。

琴人……お互に

二南……要するに問題の中心は「子」の一字にあるのですが、作者は案外何げない氣でこの文字を使つて居るのでは、ありますまいか
琴人……ごうもその様に思はれます。するとこの句は平凡な脱がれません。しかしこの句より「冴えた月簀しき者に似し二月」の鋭い感じの句もある。

近作柳樽より

琴人提出

寺の鐘寺の鐘京に住み飽きる

木 公

琴人……京都を餘りよく知らない私は京都に住む人々を羨ましいと思つて居ますが、成る程寺ばかりの京都、永年住み馴れて了へば飽きると云ふ事は考へ得られる。この句は有

名な古都であるだけに、それが住み飽きると云つた所に川柳が生れた。この際「寺の鐘」と持つて來たのは老練だ。

(この時亂耽氏出席)

華水……住めば都の譬があります。京都の外に居る私等には京都を非常によく見て居ます。「大阪は轢かれかけても好い所」此の境地が川柳だとも思ひます。京都に住んで毎日寺の鐘を聞いて居る人が、外來者よりも好い感じを持ち、それを誇りとまで思つて貰ひたいものです。

亂耽……この鐘は希望の鐘ではない。極言すれば逃避の鐘だ。その鐘の音を朝夕耳にする事は朝氣ある作者には一つの苦痛なのであらう。句としては佳句と思へないが、京都の一つのカラー、そしてそれを見る作者の氣持ははつきり僕に受け取れる。

二南……私は寺と云ふより他の言葉を用ひる方が、もつとこの句をローカル、カラー的なものとしないうかと思ふ。五葉氏の「大佛の鐘杉をぬけ杉をぬけ」の様な句が京都にも出来得るもので無いかと思ふ。單に寺と云ふよりも、はつきりと〇〇寺とした方が面白いと思ふがごうでせう。

琴人……京都は寺の多いので有名な所だ。そ

れから五葉氏の句及び華水氏のこの句に對する希望とこの作者の心境とは全々別なのである。この句はこれで出来てゐる。

亂耽……つまり作者は京都に對する倦怠を讀んだ迄であつて〇〇寺とはつきりする事はこの場合いらなと思ふ。

光耀抄より

亂耽提出

ローラーにおしひしがれし春の土

機見女

亂耽……光耀抄作者のものとしては、稀な線の太い男性的な句で底に鋭い社會觀の一端をはのめかした句である。資本家とプロレタリアと云ふ二つのローラーにおしひしがれて居る中間階級の現在の悲哀が恰度この句の春の土の悲哀なのである。

二南……曾て蔑乃女史が「女裝せる男性作に與ふ」と題して完膚なき迄に光耀抄侵入男性作家を痛罵されたが、この句を見て啞然たるもののみではありますまい。私にも「プチアルの惱みを知らぬ鑿穿機」と云ふ句があるが機見女氏の句には明かにノックアウトされた型ですれ。

亂耽……作者は私の先程云つた様な意圖で持つて居られないかも知れない。只私が此の

句からそう感じた迄です。「春の土」と持つて

來た所矢張り女性的な柔かきを感じられる

華水……今亂耽氏の云はれた様に、只單な路上スケツナの句と思ひます。句の中に表れた

「ローラー」なり、又次に來た言葉が男性的である

と云ふ意見を脱れられないでせう。

琴人……光耀抄の句を通じて、近來の女流作家が社會的に關心を持つて素晴らしい躍進

振りに流石の今晩集つて居られる。本社の中堅作家連は顔色からしめて居る。それ又昔型の女らしい句と云ふ感じよりも、男性的であることは時代がそうさせたので、別に昔の

女の様な弱々しい句を、求める譯ではないが

求めたいと思ふ氣持がする。

亂耽……あながち此の句が男性化して居ると云ふので悪いとは言はないが、女性には特有の社會観がある筈である。この女性らしき線を持つ特有の社會観を鋭く、観させた句を

作つて頂く事も光耀抄作家の歩むべき一つの方向だと思ひます。

近作柳樽より

二南提出

親しめぬ友の書齋の大き過ぎ

荷 平

二南……一讀して勿論「親しめぬ」は「友」に就くものと解したが、再讀して或は「書齋」に就くのでは無いかと云ふ疑問が湧いた。しかしそうすると、下五が餘り説明に隨して聞えるので再び「友」に就くものとして反アル

ジョアの氣持の句であると云ふ事に落着きました。

琴人……僕には、大きな書齋に親しめないと解した。先日僕の句會吟で「金借りに來て絢爛の間に怯へ」と云ふのがあります。そんな心境と似て非なものでせう。

亂耽……僕は友達と親しめないのだと思ふ

「書齋の大き過ぎ」で友の階級を表はして居るのであらうと思ふ。つまり軽い羨望と階級的反抗を詠んだ句であらう。句のリズムが上五の「親しめぬ」で軽く破壊されて居るので

兩様に解釋が生れるのだらう。

華水……「親しめぬ」が友の形容詞になつて居ると思ふ。それで二南氏亂耽氏の說と同様に解する。琴人氏の様な意味にとるならば「親しめぬ」とすべきだらう。そして此の句の中に階級的反抗が盛られて居るのは明かである。

二南……私の結論が正しいとするならば、「友の」を「友は」とする方がより妥當であると思ふ。

琴人……僕は軽い意味で、この句を見たのである。諸氏の說も一應はうなづかれるものであります。

川柳雜誌社 創立十週年記念句會プリントより
神戸支部

十の句十句 (柳多留より)

くわいらいし十里程來た立すがた (初篇)
金堀と井戸ほりの氣は十文知れし (二篇)
一箱の馬宿々ば盗み出れ (七篇)
十箱の馬宿々ば盗み出れ (八篇)
初箱の馬宿々ば盗み出れ (九篇)
容体を十分きくとひぎを立 (十篇)
五日めと十日め須磨で御寵愛 (十二篇)

十手のゆびさすはころまちといふ (十三篇)
うれの雪打拂ひうちにはらひ (廿四篇)
十徳の雪打拂ひうちにはらひ (廿四篇)
神戸から出た十柳誌 (括弧内ハ發行人)

つばめ (前田 青岸) 茶 (池口 苔可)
羽衣 (中島 柳坊) 覆面 (三條東洋鬼)
椎實 (富田 青波) 拍子木 (廣川 番翁)
白扇 (高橋古城山) めだま (住 夢遊)
柳太刀 (前田 青岸) うあうすと (楳元 紋太)



双物

双物屋の双物

双物屋は恐る／＼の型で 見せ 沐天
紙ばかり切つて夜店の双物賣り 九文銭
持ち押れた手で双物屋並べ替へ 荷千
双物研ぎ夜店の裾で古い顔 三郎
矢鱈に光る夜店の双物 虚白
夜店から保證をよめて買ふて来る 今雨

白い手が持つ双物

新妻のまだ亂調子 胡瓜 切れ 喜由
組の音庖丁はきれぬなり 方眠
珍客へ妻の双物に 錆があり 白峯
庖丁もきれいに並び 新世帯 四五磨
女房のトンカツ庖丁で切つて 功郎
錆ないだけで切れ味の悪いこと 多郎

双物の老衰

下駄の齒へ鯛の昔があつた出双 勝二
肥後守勤續振りを見せて ちび 法泉
荷造の双物軍手へ投げて やり 涎潮
双物の脅威
人間を甘くみてゐる九寸五分 洋々
うつぶんを吸つた双物の底光り 紫石

松盛琴人選

剃刀の刃のいま 切る 喉佛
生か死か双物にふれる心もち 柳人
解決を握る双物の見當らず 水車
惡漢にされてナイフの面白し 野郎
上かん屋双物三昧見してしまひ 明珠

切れ味はよし

切つたあと双物踊らす板場なり 元山
決心の顔がうつつた日本刀 砂詩朗
剃刀の切れ味もよしホネムーン 利生
男の子ナイフを持つて何か出来 紫陽

双物でない双物

姉藝者双物のやうにものを云ひ 柳夢
双物傷あるで兄イの顔が利き ひさし
セツト裏名刀二ツに折れてゐる 一曉
豆腐屋の庖丁豆腐だけが切れ 柳星

佳作

うと／＼と床屋の腕を信じきり 慈雨來
沈黙の部屋に白鞘カルモチン 竹雅
リング割く双物病舎は静かなる 麗光
幻想の破れリングの皮をむく えい
研ぎすました刃に吸はれる魂 比左夫
メスを持つ手切つて白き部屋 六郎



雨 緑

▼前號の

遅刊で讀者諸君に多大なる御迷惑をかけました、電話で數十回の問合せや葉書その他で多数の催促

か参りましたのは、實に申譯がありませんでした。延刊の理由は讀者諸君のため今後の社の基礎並に發行を一層堅實になさん爲めでしたから御安心下さい。

▼主幹路郎先生の原稿や 句が二月號並びに三月號にないので、皆様から病氣でないかと案じて來られました、最近健康は快復されましたので次號あたりから御執筆されることと思ひます。

▼江戸みつづ君は、社友春之紀太君の店から奉天の出張員として渡瀆されましたので、その際本社から路郎先生、紀太、翠夢、琴人、圓角多郎、あやみ、いさむ、葉平の諸君の外十數名、神戸まで見送り神戸から華水、春秋竹橋の諸君が迎へ、本社旗、神戸支部旗を十數本がさして賑やかな見送りでありました。當日見送りの人々に春元紀太君が greatly な歡待と旅費までして下さいました。

▼同人岩崎柳路君から 満洲建國一週年記念

(軸)業物といふのは人を切り

琴人

蛙

雨蛙零の方へ向きを變へ
牛の鼻掠めて蛙一つ飛び
赤蛙持つて来るのも祖母らしい
やる瀬なく今日も蛙の聲に暮れ
日本晴れこんなところに蛙ゐる
雨蛙うつかり枝を飛びそこね
雨蛙すました顔で佛の座
どこから飛んだ蛙に鐘がなり
笹の露と光つた雨蛙
入道雲へ心せわしく雨蛙
蓮の葉にとまつた蛙唾をのみ
手をついて陳情攻めの蛙なり
蛙鳴く里へ罪の子を預け
雨だれへ蛙ビヨツコリ向を替へ
驚いた蛙不覺の枝を落ち
蠅一つ食ふて蛙の知らぬ顔
相談をする氣か蛙向ひ合ひ
猫の眼の丸さへ蛙動かない
庭石に置物めいて雨蛙
追へば飛び飛べば追ふ子と蛙
腹立ちの道へやたらに蛙鳴き
雨蛙旦那が來てるハツ手の葉
行儀よく手洗鉢に雨蛙
蓮の葉の蛙平和のかたちなり
別荘の夜を蛙に寝つかれず
田の面から枝から蛙雨を呼び

洋々 かいを ひさし 四五磨 元山 菊路 助星 白菊 青波 鹿鳴 紫雲 水郎 今雨 詩郎 曉童 白丘 祥月 西英子 浚食子 一方 阿眠 紫陽 陽

生ぶ毛スウツト剥れて肉の戰慄

安西杏三選

同

呼ぶ蛙こがるゝ蛙黄昏れる
蛙の聲も何時か聞きなれて夏
その邊で死んだ噂え蛙鳴く

◎

畦道の蛙左右へ分けて飛び
蓋されたやうに蛙は啼き止める
満願の初瀬の廊下に蛙鳴く
かじか鳴く谷で女は無理を云ひ
おぼろ月狐化けそくに啼く蛙
失戀の男へ蛙背をむけ
道風の蛙はいつも宙に居り
逢引に蛙は足を踏まれかけ
雨蛙雨の下から生きて来る
せめてもの啼ける蛙が美やまし
袴を着せて見やうかひきがへる
絶食の秘決蛙に學びたい
哀願をしてる形ちで蛙啼き
悪戯へ蛙は一寸飛んで置き
捜査隊空しく蛙なを聞き
嘘をついた顔を蛙に見透かされ
飛込んだ蛙ほかりとこちら向き
蛙乾からびたまゝ木の芽ふく
蛙啼いて明日の思案がまだ残り
わけあれば聞いてやらうか雨蛙
血が冷える晩だ蛙もだまり切り
御化粧の肩雨蛙にとべる距離

青松 美松 吉左右 窮集 白丘土 笛秀 雷兒 葉光 美津女 銀嶺 湊湖 新市街 英賀夫 柳夢 春光 千代吉 水車 麗光 紅生 利生 比左夫 北陽子 伊三郎 勝二 同

スタンブや切手など送つてしきりに滿洲國
の宣傳や渡満をうながして來られますが、
一泊や二泊で行けるところでないので奉天
の柳路、柳陽、みつるの諸君に含ふことが出
來ませんの、が實に遺憾に耐えません。

▼加古川支部では菊版倍大號新聞型で川柳
宣傳誌を月刊で近々創刊される由、大いに讀
者並びに同人社友の諸君の御後援をお願い致
します。

▼米村あん馬君(本社客員)が川柳生活二十
五年記念並びに下村猫丸女史の八十一歳祝
賀の山陰川柳大會を、瀨愛川柳社の主催で四
月一日午後一時より松江市殿町鳥取教育會
館で開催されます、尙本社の松江支部、篠川
支部、八束支部とが、この大會を後援されるこ
とになってゐますからさぞ御盛會になるこ
とと思ひます。

▼岸上錦石宮岡白峰の兩君が、本社の社友と
して入社されることになりました、今後活
躍を祈ります。

▼福田鶴峰君は、社友から同人に推薦される
ことになりました。今後は一層本社のため活
躍されることになってゐます。尙同君は多年
本社會報係として、御盡力されてゐましたが
三月より須崎豆秋君と交替されることにな
りました。

▼社友須崎豆秋君は、天王寺支部幹事として
活躍されてゐましたが、今回會報係として活
躍されることになったので、後任幹事は福田
鶴峰君が擔當することになりました。

▼同人中島點洲君は、同人から社友に變更し

暮れ残る鐵に蛙は親しまれ
腹見せて蛙ほんとに死んだらし
己惚れは蛙へ思案續くなり
蛙鳴け鳴け明日も天氣だ働くぞ
餌箱の上で蛙はこちら向き
コロコロと蛙が鳴いて陽が落さる
戀をして居る蛙見つけ病み上り
蛙を行く野心蛙に嘲けられ
失職の今日も蛙に見上げられ
大砲の轍に蛙無慘なる
佳調
プラタナスに蛙見つけ待ち呆け
柳人

花見

花に句を釣るに巡視の眼が光り
花見時事掌は外にぶらさがり
甘黨も花見に少し呑んでゐる
新調の會期花見へ持ち出され
花の宴とてもおもろくなつて來た
丁度今満開と云ふ花見なり
花の山僕の父さん酔うてゐる
麥踏もすんで氣樂な花を見る
團參は花見八歩の朗かき
集つた髪お花見へ誘ひに來
娘等へ花見の道がせまい事
タクシーの中で花見の酒が減り
弟子もなし師もなし花へ浮たり
酔ふてゐる花見巡査を笑はせる
ひまらしい顔が揃ふた花見舟
子雀
美津女
正路
たけを
禿山
方眠
夢人
迂均
紅帝子
英賀夫
曉星
變人
沒食子
菊路

實驗はお玉杓子のまゝで死に
目高追ふ子等に蛙の軽く飛び
赤い灯え馴れぬかじかの夜店を
竹竿の届かぬ處へ蛙鳴き
親蛙からかふように後ろ向き
雨蛙八ツ手の角に丸く揺れ
これだけのたまりへ蛙すまして
すらりつと借家蛙の眼に並び
雨蛙葉裏がぬくいよい天氣
(人)未亡人心の冷えを蛙鳴く
(地)脂肪過多河鹿の聲も足らず
(天)春あわし蛙を切る鐵を立て
耕法迂明三山野白湖
民泉均珠郎月郎帝山山
慈雨來

中島鐵洲選

花見から戻つて妻の愚痴が出る
花だより電車のビラに咲き初め
團服の花見喇叭を吹いてくる
國訛り花見の酒に酔ふてゐる
學校の歸り花見の客と乗る
女親花見へ若くなつてゐる
圓山の四月に故郷の母を連れ
花見から又採め事が一ツ増え
散り残る花へ詰襟母と來る
こつそりと出て來た花見雨と
花見から歸る大阪暮れかゝり
櫻咲く國え異人の船が着き
人間のさわぎを笑ひ花が散り
妻に子に見せたい花を觀て戻り
何處をどう花見に?もどれ込み
北陽子
三三句
雷兒
白蝶
白菊
沐を
鍾生
春光
柳次
一笑
湖山
富美三
青兒
泉三郎

三月例會

差上る誌表の句の出席者の初め
を下さる御合せて誘います
日 時... 4月6日(水曜) 夕7時
大阪市南區日本橋牛番
南區東山南側2479番
會 場... 道頓堀俱樂部
南詰書店電話
兼 題... 「幸福」8句 路郎選
費... 30 錢 (鉛筆御持參)
幹事 白峯・禿山・おさむ・二南

川柳雜誌社

て一層活躍されることになつてゐます。
▼花岡百樹君(信州)は來阪中本社の三月例會に御出席される約束でしたが、突然御病氣で遺憾ながら欠席されました。
▼東區人創立會を三月十九日夜、南區南阪町いし堂で開催されました。この會は東區在住者ばかりの會合で話を聴いたり、句を作つたりして川柳以外に親しくするために生れ

たもので本社から路郎先生、並びに賛成助員藤本卯之助君などの外數十名出席されました。
▼齋藤松憲君は柳界で三十年精進された句を集めて「松憲句集」を刊行されると同時に出版記念會を三月二十四日夜京都御源寺で開催されました。こうした川柳の句集を出されるまでの柳界の努力を大いに推奨されねばなりません。

子を連れて畫の櫻を見てかへり 今 雨

佳句

制札がこけたまんなの花の山 麗光
夕櫻酒にいやしい人に散り 勝二
持て餘す妻のコツプへ花が散り えい
思ひ切り容む氣花見へ二本提げ 野朗
信心の父は櫻も見えず歸り 阿鴻
つゝましく造幣局を通り 抜け 水車
繡帯が花見の里ですつてくる 明球
すぐ其處に煙突がある花の山 白斤
紙屑が目立つて暮れる花の山 同

拙吟舊作

懷を櫻に見られまひとする 鐵 洲

選後言

諸君の力作の選をするに當り、光榮と云ふよりも、恐怖を感じたのですが、幸に課題が花見、私が此の年になる迄毎年繰り返されて、諸氏の想像以上の花見もやつた男なのです。

私のさうした事が斯くも嚴選となつた事と思ひます、惡からず御了解願ひます。

(飛龍社刊)

▼大島濤明君より(大連) 江戸みつる氏の御來訪を受け久々川柳雜誌社の様子を承り嬉しく存じます。「聴くこゝとも多くて進む櫻止瀟明」「久方之間く大阪へはせる夢三雲」「旅の夜を語る嬉しさやみすこしみつる」「路郎君」▼竹内機見女君(大谷) 今日螢ケ池の句會へ出席致しました、支部の皆様は元氣な御様子でうれしく思はれました、紅蔦さんと凡子さん

懸賞川柳募集

課題「警察風景」 植木忍佛謝選

選者奉職十五年を記念として混沌たる現代世相に和やかな川柳を以て警察宣傳に資せんとす、振つて御投吟下さい

賞品 秀逸一句記念懷中銀時計贈呈
住唱十句各記念品贈呈

用紙 隨意但し一人十五句以内の事
×切 四頁末日

投稿 東京市澁谷區代々木上原町一
所 一四〇 植木忍佛宛

發表 既發表警察關係の句へ共に一冊とし六月刊行各警察關係方面へ贈呈但し投稿と共に二錢切手八枚同封あれば製本出來次第お送りします

後援 國民川柳會

川上三太郎

と三人でお話してる中、紅蔦さんと私は同縣人である事を知り思ひがけなくもうれしかざりでした、困つた事一つ、それは「巻紙」の選者にされた事です、生れて始めての私、そんな資格はありませんのに。作句後記念撮影をして散會致しました、紅蔦さんの寫真一葉を胸に、おさめて刀根山を降りました、うれしかつた今日をまづ先生にまで。かしこ

(後方宛)

▼都藤古木君は二月二十二日出度華燭の典を擧げられました。お喜び申し上げます。

▼吉田晚春君は二月十五日二男實君をもうけられました。お喜び申し上げます。

▼松本六郎君は、長男をもうけられました。お喜び申し上げます。

▼同人福田山雨樓君の御令息が御病氣の由一日も早く御全快を祈ります。

▼同人安井ひろし君は家事の都合で退社されることになりました、捨土重來の日を期待してゐます。

▼本社八平支部創立記念の寄せ書き、痴人、無鐵砲、柳人、亂笑、鹿緒、法泉子、青波、遊星、莞路、六郎、巷二外數名の諸君

▼本號の編輯は町二、琴人、亂耽、水車、杏三、豆秋、雅幽の諸君と私とで事務所致しました。

前號の正誤

二一頁 後より五行目

虛傷の戀去年の辻のそれつきり あや美七〇頁下段十一行目より五句天痴人の句

七三頁下段末行

刈田ひろこり裸木一本の冬空 木 鬼四五頁 轉居欄奉天千代田通三七寺庄洋行内

江戶みつる 五三頁 誌友紹 介關澤井星城

改號

前田千里君は雲里、岸本芳夫君は芳平と改號されました。

千日前今昔史 (七)

木村 半文 錢

(14) 見世物一覽

千日前今昔史も以外に、長文になつたので少こし此の邊で失敬して省略する。即ち驅け足的に其頃の見世物や興行に關して、筆者の記憶する中での興味ある二三を紹介し、千日前に關する興行を打ち切ることにせう。

寶樂一座の南隣りには小さな見世物小屋があつて、一度敷抜けを興行したが、その時新案だつたのは地獄の紙の橋だつた。これは白い布を橋のやうに釣り下げたもので、見物は是を渡つて向うへ行く——。だが大抵はころりところげ落ちたもので、下には網が張つてあつて落ちてても怪我をせぬやうにしてあつた。客同士は落ちるのみ見て互に哄笑したものだつたが、中には婦女子が落ちて連も風紀を紊したので遂に禁止されたと聞く。恐らく看物は是を見るのが唯一の楽しみだつたに相違ない。

電氣が未だ今日のやうに普遍的でなかつた時代であつた。一度、金魚をガラス鉢に入れて、それを手で握むと懸賞をくれたのがあつた。勿論金魚入れには電流が通じており手を入れるとびくりつと感電するから客は驚いて手をひくといふ筈に他愛もないものだつた。然し、それでも當時のお客さんたちの興味を惹いたものの一つだつた。

猿芝居、犬芝居、足で踊らす人形遣ひ、玉乗り、女角力、神童の字書き、ヘラヘラへ、其他何でもござれの興行がとつかけひつかけ打たれて、千日前の空氣を醸成せしめたものだつた。恐らく千日前の面白さは此のインチキ的な見世物にあつたと感ずる。諸國に於ける見世物の變遷移動を通觀すると、やはり此の種のクロ味、エロ味を編みまぜたインチキなつぶりな點に共通の存在價值が認め得られる。その種の興行がだん／＼と都市の常設的興行から驅逐されて、田舎廻りの旅興行

や都市に於ける祭禮の一時興行に移動して行く傾向になつたのは、何と言つても世態が斯く彼等の消長を左右するのであるから如何とも仕難い運命であるうが、然し、縱令その興行にインチキ的な分子が含まれてゐても、寧ろその中に一種のユーモラスな點があつて明瞭な感覺を與えるのではないかと思ふ。

今日の萬歳が尙ほ見物の足を吸收するのは他に斯うした朗かな興行がなく、何れを見ても活動寫眞ばかりだから、却て外に興味を求める客にとつて、萬歳の存在を必要とするのではないか。

それと同じやうに、インチキ的な諸種の興行にしても、活動寫眞中毒の現代に於て、復活すれば相當の客足を引くに足るだらうと信ずるが、然し、今日のお客に馴染の淡くなつた斯の種の興行が既に過去の遺物となつて了つたのであらうことも肯ける。筋がある恐らく活動寫眞の全盛は過ぎて、今日の民心は必ず他の何かを索めてゐるに相違ない。あのレグユーなども恐らくは現在の若い人々の性的魅力の對象だと信ずるが、然し、これも一時的で深く現在の客に喰ひ入つてゐるほどの魅惑力もない。トーカーの進出、やが

て来るべきテレビジョン時代もあらうが何れにしても活動寫眞の延長する進化挑梁に過ぎない。今少し日本人らしさの興行が勃興しないであらうか。と筆者はツイ愚痴を列べたくなるのだ。

日露戦役以後だつたと思ふが、例の蓄音機が輸入されて、千日前を風靡した時代があつた。未だ蝸牛時代であつて、大きなラッパを取り付けて客を呼び寄せ、浪花節などを一席二錢位で聞かしたものだつた。細いゴムを通して聴音器が幾つもあり、それを客は耳にあて、聞き入つたものだつた。客の中には蓄音機の構造を知らず、或は誰かが機械の内部に窺かに隠れてゐて唱うのではないかと怪しみ、そつと内部を覗く人間もあつた——といふ程に人氣を集めたものだつた。最も、當時鶴屋一座の俄にも早速コレを取り扱い、一人の人間が機械の内部に隠れていろ／＼の歌を唱うて聞かせるといふ趣向のものが大當りを得たことがあつた。今日のレコード界を振り返つてみると、さういふ幼稚な時代もあつたのだから決して笑はれないと思ふ。

又、電氣按摩が進出して千日前の散歩人を不思議がらせた事もあつたが、それらは興行ではなかつたが、然し、興行物ほどの人の足を

を狩り集めたものだつた。

是も日露戦争前後の事ダークの操り人形が来て、西洋くさい人形芝居を見せたが、これも當時の千日前の異色だつた。科白は英語だつたから理解することが出来なかつたが、文樂の如く人形遣ひが舞臺上で見へるのではなくみな上方から遣つてゐるから其姿は見へず従つて見苦しいことはなかつた。それに小さな西洋人形がいろ／＼の滑稽な所作を演するのであるから、少年少女の見世物としては非常に歡迎を受けたものだつた。前後二三回来阪したと記憶する。

播重には長廣一座の娘義大夫、今は跡形もない竹横(即ち竹田屋の横の意)には呂昇が同じくかゝつてゐた。今の竹林寺前の以前三友俱樂部と稱した席には彌太雲がしばらく頑張つたこともあつた。何れにしても以前は呂昇、長廣時代で娘義大夫即ちデレ義太と稱して可なりの人氣を集めたものだつた。東京では學生の人氣が素晴らしかつたといふが大阪では學生も少く、従つて商家の隠居が特種な右閑階級にのみ人氣を得てゐたらしい。現在小仙などが一方の旗頭となつて恢復運動をやつてゐるらしいが、その頃は小仙などの名も見へず、つと後から擡頭して來たも

のだ。あの一種特有の太夫の紹介口上は娘義太夫のローラルカラーであつた。若い娘が舌短かに語ります太夫は……」とやるあたり和やかな氣分なものだつた。

法善寺境内の兩落語の定席は、現在のやうに吉本に統一されぬ以前は、兩々火花を散らして戦つたもので、西の桂、東の三遊派と分れ、客筋も自然に兩派に分立してゐた。落語本位に聞かうとする者には桂、いろものゝ華美な通を好むものには三遊派、といふ相場が決つてゐた。

當時は御大文左衛門を始め、錚々たる落語家が集つてゐた。後には文枝も東京から歸り一座は米喬、米朝、文團治、米團治、文部、松鶴、扇蝶(後の染丸)文三、新左衛門等が毎夜御機嫌を伺つたもので、謂はゞ大阪落語界の全盛時代だつたと信ずる。一方には南光(後の仁左衛門)枝雀、三輔(後のさくた)等があり、東京落語を交へて賑々しく開演してゐた。何と言つても落語には文左衛門の大師匠を始め名人文三、上品な文枝などが出演したから何れも聞きこたへがあつた。づつと後に京都の文吾も加つたが、是は一種の淋さがあつたが、名人藝だつた。大師匠に十八番の「らくだ」を大層褒められて遂に發狂したが

惜しい人物だつたと思ふ。殊に文枝、文三を失ひ、曾呂利や文左衛門が隠退して了つた後だから、この人の發狂は非常に惜しまれた。

訥辯だつたが「らくだ」や「基どろ」は一寸この人の右に出る者がなかつた。東京の名人小さんが同じく「らくだ」をやつてゐたが例の陶然と酔つてくる自然の妙趣は遙かに文吾に及ばなかつた。それ程に巧妙だつた。この文吾が發狂して間もなく例の隆い鼻を利用して土瓶を釣下げた弟子の小文吾も同じく狂つて了つたさうだ。師弟共に發狂するなごよく／＼の深い因縁があつたのであらう。筆者がいつも思つたことだが、落語界に比較的に美男子——といふほどでなくとも——小綺麗な男が簇出して來たのが、大阪落語の特色を失ひ、衰退する原因の主なるものであつたといふことである。これはつまりらぬ發見であるが、要はおもしろい顔だつたから落語家になつた——といふ昔の特色が稀薄になつて行くからだ。同時に變な顔だから舞臺効果もあり、それは落語家としては二義的なものではあるが——、又、藝道にいそしむことも熱心だつたのだ。それが段々と美男子になつて行くと、女極道になり易く、従つて藝道にいそしむ機會が乏しくなつたのだ。文左

衛門や文三や文枝やの至藝を知る者にとつては今日の落語が如何に無味荒寥たるものであるかを痛切に知るのである。今日大阪落語の滅亡の聲を聞くが、これは落語の罪でなく、落語家自體の罪であると言ひたい。と云うのは既に大阪落語に名人が無くなつたことを告白するに外ならない。松鶴、ざこば、鹽鯛、家橋、等が頑張つても、エロの春團治が力んでも既に名人藝ではない。ただ大阪落語の衣鉢を傳へるのみに過ぎない。その點で文吾のやうな名人肌の缺乏したことを深く惜しむものである。恐らく、斯かるテムポの早い時代には昔のやうな名人をつくる可能性があるまい。要は手取り早く金になれば夫れで良いいといふ生活本位の速成主義ばかりだからだ。話は岐路に入つたが、事の序にこゝらで一本釘を打つておく。

この二軒の法善寺の落語も、最近に至つて東の一軒のみが残り、西は飲食店となつて了つた。紅梅亭と花月亭の席名も斯くして衰退期を深めて行くのか——嗚呼。

講談席は現在の南海通り南側の萬歳小屋が定席で、後に浪花館となつた。今一軒は法善寺の東門を入つた北側、ト一の善哉屋と向合つた小屋で、石川一口や旭堂南陵等の定席

だつた。恐らく筆者の知る限りでは斯の二軒が千日前の講談定席だつたと考へる。あの一一杯一錢のカキ餅茶と共に講談も亦時代的に落伍して了つたのか。——

(15) 武田貞一師と繪草子屋

千日前の魅力は何といつてもインチャキ的な各種興行にあつたのであるが、然し、千日前をアラク人々にとつての興味は、その外にもあつた譯だ。就中、最も散歩者を悦ばせたものは武田貞一の小奇術であらう。

この武田貞一の店？は坂町の北東角で、法善寺の東門に面してゐた。現在萬年筆などを商つてゐる店角で、間口は一間そこ／＼の狭い家だつた。

店の正面には、高いテーブルやうの臺が置かれ、その上で小奇術を演じて見せるのだが決して見料をとつたり、投銭を貰うのではない。つまり種々な座敷手品を演じて、それを希望者に教授したり、手品の材料を賣つて生活の資にしてゐたのだ。

店主武田貞一師は五十前後（或はもつと若かつたかも知れぬ）の年配で、美しい長髯を顎に垂れ、いつも童顔を愛敬たつぷりにニコツカせてゐた。眉の太い、象眼の、鼻の隆い

人物だつた。

よく見せたのは白紙の中に包んだ一圓紙幣を蠟燭の火に焼いて抜きとる奇術や、扇子の中から出頭没頭する銅貨の早業、カンマと鼻の脂で火の點する蠟燭の滑稽、幽霊蠟燭などであつた。謂はゞ奇術としては寔に幼稚なもの許りではあつたが、その人の人懐っこい風格と、紋切り型の洒落などが人氣を集めていつも店頭は黒山を築いてゐた。

若し、奇術を習ひたいと思ふ人があつたら店へ通し、垂幕の影で傳授するのだ。その間は店へ幕をひいてゐた。傳授が終ると又もや幕をあけて奇術を始め、客を呼び集めるのだ。たしかに一と頃の千日前への愛敬ものだった。特に一日とか十五日の紋日には大變な人氣で寄り附く事もできない程の人ばかりであつた。

この人氣は可なり長い生命があつた。然しいつとはなしに姿を沒して了つたが、筆者は非常に淋しく感じた一人だつた。旅興行にでも出たか、或は相當の蓄財をして隠退したのか、その何れとも知るところがない。

武田貞一師の店の西側にあるのが、現在でも依然と残つてゐる高橋の繪草子屋である。隨分と古い店だと思ふ。店主は素人義太夫と

して名の知られた、若きんだが、あの好々翁らしい店主の姿は既に見られなくなつた。この店での印象は何といつても店頭に吊り下げられてゐる各種の番附だつた。特に興味の多かつたのは金満家の番附であつた。

(16) 法善寺境内

法善寺境内は、可なりの變遷はあつたが、然し昔乍らの店が多く遺つてゐる。西門のみどり、東門のト一（或は廢業してゐるか筆者は最近を知らぬ）は共に古い。上戸と下戸とを東西の入口に分けたところその對象が面白い。

特に筆者の記憶にのこるのは、この境内の東寄りに出てゐた銀杏屋である。いつも和の揃つたギンナンを焼いては柳の上に盛つてゐた。秋頃には栗が小さなカンテキの上で焼かれてゐた。これも法善寺の一つの名物だつた。時には法善寺を抜ける藝者や娼妓が、そつと買つて行くのを見かけたことがあつたが、艶めかしい情緒だつた。

境内北の通りは、東から算えて入口の二軒は昔乍らの店であり、同じく中に入つて花宗夫婦ぜんざいも暖簾は古い。其他二鶴、正辨丹吾、湖月等も同じい。○淺、樂亭、萬直し

ふくべ等が姿を消したのは淋しい。特にみりん焼のカキモチを賣つてゐたお婆さんが、萬直しの向い——即ち現在の三木樂器店の南側——にあつたのは知る人ぞ知る。これも法善寺内の一名物だつた。

最近聞くところによると、法善寺の此の細い露路を擴張することである。勿論、火災防備や衛生、風紀の上から見ても斯の擴張案は妥當であるが、然し、法善寺の興味は矢張り斯うした狭い土地の押し合ひ式にあるのであらう。餘りに廣きに失すると或は過去の老舗を臺なしにして了ふ懼れがある。赤玉や美人座が如何に資本主義時代を謳歌して未だ——日本人の大多數は法善寺式の手輕な日本料理に惹きつけられるのであらう。それにしても未だ法善寺境内にピフテキを焼く匂ひがせぬのが、蓋し法善寺の法善寺たるところか。心強い限りである。

(17) 竹林寺

毎月二十一日には、白い袋や黄な袋を手に携げた善男善女を滿員せしめる竹林寺は、南無大師遍照金剛を祭祀してゐる。淨土宗に於ては天王寺逢坂の一心寺に繼ぐ、收入があると思はざる程あつて、實に絶好の土地に安置

されたものだ。筆者の少年時代には大師癡りだつた母に伴れられて、よく此の大師様のお百度を踏んだ、あの大師の祭壇裏に「南無大師遍照金剛」だの「おんあぼきあ——」の眞言を唱えて、他の信人のともがらと同じやうに回つたものだつた。

所謂おばら(米)による鳩の群は、千日前に在り乍ら一寸異様な感じを與へた。殊に此の鳩は北門を入つたところに群れ立つてゐるが南門には少しも下りてゐなかつた。現在でも斯かる鳩の群が、集くつてゐるが何うかは知らないが、多くの子守が此所に遊び戯れてゐたのも過去の一つの風俗を知るに足る。

南門入口の鐵靈鐵泉と餅を焼く店の二軒も可なり古いものだ。昔は胸すかしと言つてたと思ふが、いつ頃からハイカラな鐵靈鐵泉になつたのか、其の點は詳しく分らぬ。餅を焼く店も黄金餅を焼いて醬油をつけ、金網の上に並べてあつた。

南門と北門との中間或は北門から少し北へ入つたところに、辻易者が毎晩店を出して、小さな臺の上に薄暗い八卦の看板たる行燈をのせてゐたのも懐かしい光景だつた。

特に竹林寺の北の辻角には、齒拔屋の定店があつたが、これも最近影を沒したらしい。

(18) 其 他

千日前での唯一の本屋は樋口書店だつた最も、高橋はあるが、この店は繪草子が本業だつた。だから嚴密に言うとは樋口は千日前に於ける唯一書店だつたのだ。

店は現在歌舞伎座の建築地の南寄りにあつたので、狭い勸商場の南の一角にあつた。本は一冊づゝ棚の上に夜店式に列べられてゐて、講談、文學書が比較的に多かつた。謂はゞ大阪本の赤本式で、この店講談本を發行してゐたのだ。その店主の令兄は今も樋口隆文館として貸本屋向きの講談、小説本を發行してゐる。

店主は口数の少い、ごちらかと言つと愛嬌に乏しかつたが、然し千日前をぶらつく愛書家には唯一の足を止めるところだつた。

この勸商場の南にあつたのが、牛竹で、今の魚伊の前身だつた。表から見ると牛鍋が葱や豆腐と共に列べられて、見るからに露骨な店だつたが、然しなが——一時は流行つたものであるらしい。

その南隣に射的場があつた。射的場の南一二軒来たところに名高い齒拔屋があつたが、是も行方不明となつた。

それから南は小さい小屋一二軒と、あとは多くの汁屋だつた。即ちニューメンと言つて居た。障子張りの看板が入口の左右に立てられて、大きな鍋が二つも三つも並び、湯氣を凄まじく立てゝゐた。

千日前から南海通りを西へまぐる南角の煮賣屋も可なり古い店だ。客があると酒だけは必ず隣の酒屋へ徳利を持つて、買ひに行く。即ち酒屋は斯の店の家主だから、條件として自分の店で酒は賣らない。必ず家主の家に買ひに行く。それが、一つの名物ともなつたのだ。勿論、他の煮賣屋と違つて酒は灘の生一本を賣つたからだ。今どき、こんな商業道德を尊ぶ店はあるまいが、二三十年前までは斯うした人情美が存したのだ。

この店の東角のうごん屋も昔乍らの店である。恐らくうごん屋として終始したのは此店一軒であらう。然し最近ほうごん屋を廢して普通の飲食店となつてしまつた。

尙ほ、筆者の幼少だつた關係と、其の以後に於て餘り關心をもたなくなつてから、千日前を失敬して了つたのと、多く語るべき材料を逸してゐるのは勿論である。たゞ現在に於ても若干の記憶があるものゝみを摘出したに過ぎない。殊に、回顧すべき年度がさつぱり不確實であるのは、我乍ら遺憾に堪へない。凡そ明治三十年頃から同四十年頃までの期間だと思へば大差はあるまいと信ずる。その以後に於ても特記すべき幾多の變遷はあるのだが、それは多くの人達が記憶に新な部分であるから態と省略することにした。

この外、千日前ではないが南地五階と命名した、例の五階の展望臺のことや、南地五花街の印象など書きたいと思ふが、いづれ又の機会に譲ることにせう。(終)

断章

川柳を考へる

松丘町二

川柳味とは何ぞ

前號に、定型非定型の題で、自由律川柳の肯定を論じたら、一体自由律で川柳する場合、その音數の長さを、どの限度に止めるのか。十七字前後といつたところで、十六字も十五字も十四字も皆前だし、十八字も十九字も二十字も皆後である。甚しいのは、六、七字位から、三十一字位までのものもある。三十一音字となると短歌だが、川柳的呼吸を、自由に呼吸するのが自由律川柳なら、敢て三十一字が三十五字になつても、四十字になつても「川柳的なもの」さへあれば、認

めていゝことになる。すると、自由律現代語の短歌とのけじめは、どうなるのか新興短歌では四十字以上のものもざらにある代り、二十數字の短いものもざらにある。川柳も俳句も短歌も一切、短詩藝術として無差別だといふのならよろしいそれならそれでその理論が、別になければならぬが、さうでない限り、君の自由律肯定の實踐的基礎はどうなるのだい。と頭のいゝA氏から突込まれた。痛い所を突かれて、一本參つたが、それなり引きさがるのも縮だし、要するに自由律川柳の場合も、定型川柳と同様、その句に「川柳味」を持つてゐればよいのだ。俳句には俳句の味、短には短歌の味。川柳が短歌みたいに長くなつたら「川柳味」は失はれて仕舞ふ筈だから、川柳とは云へぬよ。と云つたら、それぢやあ「川柳味」とは一體何かね。そいつを決定して貰はぬことには、議論にも何にもなりやせん。君達が二タ言目には有りたさうに唱へるお題目だが、一體「川柳味」てどんな味のものだといふのかい。こいつは藪をつついて蛇を出したと、僕は悲し

みながら、どんな味だときかれても困るね。味なるものは、説いて解るものぢやない。そこだよ。食つて見ねば解りつこないといふやうとするのが、君の詭辯さ。とA氏の追窮は頗る急だ。君達詭辯を好む連中の蒙を啓いて、先輩半文銭が「川柳街」に教を垂れてゐる。だが、と僕。だが眞理を語るには詭辯が最も適するといふ眞理を、エンゲルスの「自然辯證法」は我々に教へてゐはせんかね。それで、とA氏。それで川柳味の問題はどうなるんだい。よし書かう。と騎虎の勢で、僕は答へた。

こゝに於て、僕は、川柳味なるものゝ本質を闡明して、これに明確な定義を與へなければならぬことになつたが、つく／＼考へてみるのに、何も川柳味を語るのに、わざわざA氏の追求を持出して、永々とまくらをふらなければ書けぬほど仰々しい問題でもなさそうに思へてきた川柳味なんて一口で足りる。曰く「滑稽皮肉・穿ち」

だが、これから先が困難である。

川柳が俳句から、區別されなければならぬものであり、そして區別されるならば、その區別の基準は、切字の如何や、季感の有無ではなくて、その作句の精神が滑稽・皮肉・穿ちに依據するか、しないかといふ點であり、この點に於てのみ川柳は俳句から區別され得るのだ。若しさうでないならば、切字は殆ど用ゐず、季節も季感も一向尊重しない新傾向の俳句と、自由律による川柳とは、同一の表現を採り、同一の内容を示すことが屢々生じてきて、柳俳は全く無差別となる。無差別になつても、大局からみて、ちつともかまはぬわけではあるが、川柳が川柳であるためには川柳でなければならぬといふのなら、滑稽・皮肉・穿ちの三大川柳味を、後生大事に守るより外仕方がないのだ。事實人々は、古川柳この方この味を後生大事に守つてきてゐる。古句の傳統に遊ぶ人々も、川柳の革新を志す人々も、要するにあらゆる川柳は、滑稽であり、皮肉であり、穿ちである。只人々は、それぞれ人々の觀點の角度を守つて、その角度から、滑稽・皮肉・穿ちの精

神で、物を眺めてゐるのに過ぎないのだ。古句の滑稽と、新川柳の滑稽が違つた笑を示し、古句の皮肉と、新川柳の皮肉が違つた刺戟を與へ、古句の穿ちと、新川柳の穿ちが違つた外貌を以て表れるのは、要するに視角の相違に過ぎないのでたとへば、處々に苔のついた庭石は、近よつて眺めると、單に汚い外形を示すばかりだが、離れて之を眺めると、同じ石が、周囲の布置配合と調和して、いかにも美しく床しい姿に見えるやうに、一口に滑稽・皮肉・穿ちと云つても、それを眺める人々の立場によつて、卑俗ともなれば、藝術ともなる。

川柳が強烈な氣魄を以て、肺腑を突かうとする鋭さは、ニヒリズムにまで高められた皮肉の精神によるのだ。川柳が微笑と苦笑と哄笑と、そして涙との明るい苦さを以て、人々の心に觸れるのは、正しく理解され咀嚼された滑稽の精神によるのだ。川柳があらゆる短詩のうちで、最もその表現が立体的で躍動的で多彩的なのは、藝術化された穿ちの精神によるのだ。

滑稽・皮肉・穿ち——猫も杓子も心得て口にする、いや、新しい人々は殊更に口を噤んで輕蔑しやうとするほど、常識化された古句のこの三大要素は、脈々としてあらゆる現代の川柳の中に生きて流れてゐる。只それが露骨に表面に出てゐるか、句の底深く沈潜してゐるかの相違があるばかりである。若し傳統を見直さうとするならば、この三つの味の再認識にあり、傳統を否定しやうとするならばこの三つの味の再吟味にある。(川柳が藝術として生きるために、傳統を見直して改築すべきか。之を否定して破壊し、新たに建築すべきか。即ち川柳味を尊重すべきか、すべからざるか。といふ問題は別に新たに論ぜられなければならない)

以上「川柳味とは？」に對する答として、古くさいとも古くさい返事を書いたとして川柳が俳句若しくは短歌と區別せらるべき尺度は「川柳味」であり、川柳味とは「滑稽・皮肉・穿ち」であると述べた。かゝる時、川柳とは？川柳とは一口に表白された滑稽・皮肉・穿ちである

各地柳壇



＝れ割を句るあちのい＝

本社三月例会

於道頓堀俱樂部

兼題 喫茶店

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

柳

山雨樓 町二 同 鮎美 選

明珠報 竹楓 明珠 春秋 同 楓選 明珠 吉左右 華水 幸捐 竹楓 珠選 吉左右 竹楓 春秋 華水 明珠 秋選

1

—(57)—

新しい墓もある笑即
(軸)新思想家憲と言ふへ突當り 琴人

川柳 松江例會(松江)
雜誌社

三月一日夜 於天神ミドリ喫茶店

奈良井柳人報

兼題「響」正雄選、同土筆蒼二選
席題 A「斧」天痴人選、B「伴奏」三雷

波選、C「腕時計」砂詩朗選、D

「響」柳人選、E「夜襲」硯滴選、

F「暖流」玲人選、G「棚」祥月選

H「チューリップ」赤陽選

砲響の中に暮れ行く熱河省 哲雄

土筆摘む母がおくれるピクニック 同

ハンマーを振れば搾取に立つ響 六郎

男の子土筆を踏んでよく育ち 同

打てば響く男であつて頼られる 法泉子

土筆摘む乙女の顔に丸い風 同

神棚に籠むる神秘を仰ぐ朝 勝人

赤い灯の響が笑ふ笑ふ春 磨須雄

支那軍としては小癩な夜襲なり 荒治

暖流に足なひたして戀を知り 砂詩朗

石切場同な響で平和なり 同

棚一つ妻の意見に逆らふて 三雷波

春の陽へ斧の働く青をのびし 同

うたがひを掛けられそうな腕時計 同

土筆二ツ三ツ四ツ五ツ春の風 同

君のえくぼが俺を夜更しさせる
伴奏へ一人ステツプ踏んで見る
エンザンの響もうれしホネムン
斧振れば竹刀を持つた型になり
チューリップ折れば垣根に怒る聲
巨木伐る木魂谷間を抜けてくる
土筆伸ぶ原に横たふ傷心よ
捨て乳に嬰兒の響浮び出る
思橋は活氣づくボン／＼蒸氣の汽笛
鬼ひ出の丘の土筆と口笛と
ウエルカム街は煙火が鳴り響き
令嬢の趣味本棚と別に生き
ハッピーに恵まれそうな片響
淋しきは斧にこだまが響くのみ
戀人の靴の響きと知れぬ胸
伴奏の口笛となる好きな曲
暖流に乗り出す大漁船の旗

響かないハートとなつて逆かれし
哲學の書棚の上のカルモチン
鉄だこと響をさげて賣られゆく
夜襲する高粱寂と風もなし
ベルシヤ猫背小庭のチューリップ
背伸びする棚へ妹の曲線美
朗らかな伴奏となり靴が鳴る
暖流は流れ日本海の春
冬の夜の構圖に響くセコンド
氣短かの男に觸れて土筆折れ
野心持つマダム赤いチューリップ

二月二十二日 阪大川柳會(大阪)
兼題 ネグタイ 丸島利生報

路 郎選

路 郎選

路 郎選

路 郎選

路 郎選

赤陽

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

ネグタイも解かず子供を抱いてる
巡查今日ネグタイで来て無心ユビ
ノータイのステツキ春の風を切り
ネグタイを紐にくけてる二十女房
黙々と黒ネグタイの二十年
蝶々からノータイにする暑いこと
(人)感情を盛るネグタイは色濃
(地)ネグタイに至るゝるゝ學者
(天)首枷の如くネグタイ結ぶなり

兼題 見合 路

母親の袖が邪魔する見合なり
水禽の金網へだて見合なり
寫真とは遠い見合の目鼻立ち
見合した頃なつかしい生活向
見合まで行かず寫真でこわられ
さい投げた氣持で扇子わたして來
見合ではかくしおぼせぬ背の低さ
見合した頃を忘れた荒み方
郊外の散歩見合であつたのだ
茶卓のみ見つめて見合済んじまい
従いて來た妹の方が欲しくなり
待望の見合さびげも剃りませう
また見合かと鼻であしらわれ
てれくさ／＼見合に紅茶持つて出る
(人)見合では赤い人とは思はれず
(地)いそ／＼と見合にゆり顔で
(天)悲しくも見合になれたお嬢さん

失望はガラスの破片にさも似たり
四十一未だ人様に使はれて
白痴の美錦鶏鳥の尾は長し

兼題 見合 路

兼題 見合 路

兼題 見合 路

兼題 見合 路

芳一

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

すぐにでも扇子が慾しい惚れぶり

席題 頑固

湯三郎選

頑固だと言はれて人の上に立ち

正甫

かたくなる人か先へ説きまはり

山彦

國の父祖先と家おとしとほし

湧三

愛慾の橋となつて耳かさす

利生

頑固さ丈が逸話になつて残つてゐ

同

父さんの頑固は母が知つてゐる

同

かたくなるお爺云ふだけ云つて

同

頑固から逃がれる様にお茶を飲み

同

争ひへ損と覺悟で言ひ通し

同

父を棄て母を棄てるも主義者なり

同

愛の巢は頑固な父と思ひ切り

同

(人)かたくなる父に似たる無口の子

同

(地)カンザーに似強さで寄附

同

(天)玲瓏として女のかたくなさ

同

(軸)云ひ出さず足袋も穿かず出る

同

(同)かたくなる云ふなとあてがは

同

いかだ會小集 (松江)

二月十二日夜 於祥月居

岡崎祥月報

兼題 梅

祥月選

初戀の思ひ出深き丘の梅

句 醉

梅見から戻りは寒い雪に逢ひ

柳 人選

兼題 雪解け

三 人選

雪解けへ晴さる姉がひざまづき

同

雪解けへ人夫忙しい橋の上

同

雪解け行く奴のすへはれが飛び

同

雪解けを待つ商人へ日が當り

同

雪解けの道失望の影長く

同

雪解けへ今朝のなるまのうすい影

同

兼題 思案

祥月選

思案したとて借金に追はれる身

思案し金無いのへ一思案

ふと思案すれば惱裏に走る智慧

兼題 長靴

祥月選

出張の徒歩で長靴雪の路

長靴のつめたく今朝の雪の路

長靴を履いてまだるき朝を行き

長靴の山越えをする身を堅め

長靴の土工へ元氣のいゝ歩調

兼題 節分

人選

豆をまく亭生の聲のござう聲

人型へ胸の惱みもなでて居る

節分に非常時日本の厄落し

豆まきに壽府迄投げてやりたいな

三面へ節分の夜の情痴犯

兼題 國旗

同

國旗ひら／一九三三年の紀元節

萬歳の國旗が立ちて涙が出

ゼネバの雲行きにひるがふ日の丸

國旗をかざし節へことほぎて

紀元節我が寒村にも國旗立ち

兼題 戀

同

失戀がバーの中で飲んで居る

失戀に慰安もとめてバーに居る

情熱の戀滿洲へ送る文

兼題 失策

同

二月二十六日夜 於祥月居

岡崎祥月報

失策へ君は又かと主人の眼
失策が敗因作つた補回戦
國際聯盟の決議勸告書
失策になると知らず勸告書
失策もあつて明らな新家庭
失策が首になつてゐる社長室
失策へもろくも敗れた常勝軍
兼題 果報
番號が差少で果報とりそこ
果報者生甲斐もなく日を過し
果報者又投資まつて儲けた
恩給でありあまつて果報者
豫算など立てゝゝゝあない
果報を夢見て都會へ憧れる
手品師に似た生活を羨やまれ
女中から知事夫人とは果報者
横顔に見ゆる果報な笑ひ持ち
商人の眼には果報な臺所
果報者もとを洗へば苦勞人
果報面なんぞと女惚れてゐる
裕福な暮し果報な親ゆづり
兼題 果報
果報者もとを洗へば苦勞人
豫算など立てゝゝ居ない
果報面なんぞと女惚れてゐる
横顔に見ゆる果報な笑ひ持ち
手品師に似た生活を羨やまれ
果報を夢見て都會へ憧れる
兼題 満員
團體へもう駄目ですと満員車
満員の早慶戦に惜しい雨

家族 又満員で断られ
満員のバスふくよかな胸がふれ
満員へ何處でもよい意地を張り
満員へ伏し勝ちない、女
満員の金切聲も春の聲
超満員満洲映画の素晴らしき
兼題 特 作 岡崎祥月選
特 作は賣約済の美術展
特 作の映畫字幕へ手をたき
特 作の宣傳は人に人が来す
特 作の人選満員にない世相
特 作映画も入りに飾られる
社長室 特 作 品で飾られる
特 作のモデルまぶしく眺められ
特 作のシナリオとなる 涙雨
兼題 星 奈具井次郎選
北極星を数へてくれた姉は死に
火星まで早く行きたい學者連
流れ星落ちて湖上の涼み舟
漁師の妻星へ聲を掛け
星あかり頼つて漁船がちなかえ
危篤電 特 急の窓の流れ星
駈落ちへ星は冷たし田舎道
ランペンのペンチへ星の夜が明け
暗雲へさびしく光る星の影
淋しさへ星を仰いで涙ぐみ
零落は星のつめたく身に泌みる
何千年星は何をか物語る
友の死を暗示した流れ星
席題 事務所貸家 五分間吟五選
貸家人家賃が高い輿論なり 磨須雄

貸家札張つてなつかし家を去り
尋ね人事務所へ家をききに行き
事務所にも長閑な笑ひ春日和
貸家が物語るブルジョア
事務所へ姉が来て彌次られ
貸家なご澤山あると旅の連れ
事務所へ行けば目につく女
繁華な町に貸家の並んで
課長秘書事務所へ知らず低氣壓
お妾の御意に召したる貸家札
事務所から派手な女が二人出る
貸家から不氣味な夜の風となり
貸家札春の陽影にさびしそ
事務所から歡喜が洩れる落成日
ランペンへ恵みの薄い事務所の灯
半でんぐで事務所のドアを開け
二月十一日 於鴉天居 鴉天居
題 梅、立腹、水兵、黒子
言ひつめられて無暗に腹を立て
彼女の真心病室の梅は笑み
腹立ちをおさへてやけに煙草吸ひ
水兵の手旗へ海の音高く
上陸の水兵のズボンへ春の風
立腹も女女の型である
女優の黒子人気がなつてある
立腹が去らぬか無言まだ續け
立腹を障子に荒く持つて行き
黒子を一つて一人ぼつて
沈黙の中で黒子をいぢつて
立腹の氣嫌なとればつけあがり
ひかり集 その十四(大阪)
葱坊主 水谷鮎美報
葱坊主病む眼射て立ちならぶ
シダナルは赤無表情なる葱坊主
青空がうつた晝の葱坊主
葱坊主向ふの山は晴れてある
葱坊主バットの殻と雨晒らし
川柳風呂 その二(大阪)
水谷鮎美報
母 水谷鮎美報
まるき背なり母の肩もむ
思ひきりあまへる我も母の瞳
母だけが起きてくれた午前二時
母も老ひたり父の短氣も折れる頃
後家で通した母の掌が大きい
洗濯の母へついでにぬいだシャツ
母の手をひいてあれが天王寺
母すこし酒をたしなむ夜があり
張かへる障子に母の氣が強い
雲
過去の想ひ雲に形作らん
怒濤の雲に若き魂がふるえ
心すさびぬ碧空に風ありき
雲映る硝子窓なる美少年
めだかの列の雲を逆のぼり
光笑會例會
三月十四日 於カナメ喫茶店 須崎豆秋報
席題 行 燈 かほる選
行燈の字がなつかしい旅の宿 緑雨

川柳 小松句會

錦水報

一月十一日太魚宅に於開催す、新人茶木冬瓜氏を迎へ美松、錦水、太魚、白山坊出席、夜のふけるのを忘れて作句す 句會後新年宴會を鵜屋に於て盛大に催した。

太魚選

バラツクへ年賀の客も這入りかれ
初賣りを旗で飾つたバラツク街
バラツクも初賣氣分 燭を増し
仮宅の住所も書いてくる 賀狀
バラツクへ場所をとつて鏡餅
バラツクへ年賀狀 東にされ
輪飾りのバラツクへ来る五ツ紋

同

白山坊選

廻禮そのまゝ受ける 雑煮膳
バラツクへ隣りの雑煮 祝ふ聲
バラツクへ年賀の客も這入られ
バラツクへ賀詞のべかれて年賀狀
バラツクに初日を受けて明けて來
初賣を旗で飾つたバラツクの街

同

錦水選

バラツクへ光る春の日
初賣を旗で飾つたバラツク街
バラツクへ場所とつてるかみ餅
バラツクで隣りの雑煮 祝ふ聲
バラツクへ賀詞述べかれて年賀狀
輪飾りのバラツクへ来る五ツ紋

風

太魚選

美松

風の尾振り動いて雲の色
電線に風がある小供の瞳
風が床の間に寝起きの子
焼野ヶ原もう子供が風をあげ
末つ子の風もあがつた春日和
曉

錦水選

繪の様な霧のかつた山の朝
曉へ今御向ひの戸がひらき
曉の大氣ふるはす鶏の聲
曉をうだつて過ぎる 渡り鳥
初詣り社殿へもう人いき
客

白山坊選

客問から洩れてる謠に酔ひを見せ
いやな客締つてからの一とさき
酔ひ過ぎた客へ女はもてあまし
お客の餘興へみんな期待す
客と云ふ手前へ無理も素直で
お客様が来て御座敷落ちつかず
客足へ女將ざりこの湯を落し

太魚

川柳 加茂川句會 (京都)

三月廿二日夜 於神源寺 平岩司郎報

待つてゐる心 陸 平選

人形もいやお菓子もいや乳も乳も
ウインドと時計待つてゐる心
待つて居る心茶菓子をはらんで
諦めて見たがやつぱり来る氣
發表へ三月の風うら寒く
冷やかな瞳と知れど待つ夕
(五)部屋の位置直と俺は何を待つ
(同)見すじき心の底の歎きよ

迷兆

(同)からたちのとげを見て待て
(同)待つ心も知すノツソリで來る
(同)ぼんやり待つてゐるとを笑ふ
(人)あせる心えおちつかうとし
(地)待つてハガキ半分書いてやめ
(天)人になり自分になつて佇みぬ

光

草青々と雲ちぎれとふ
枯草の下に新芽を見つけたれ
三笠山草ふむだに錢を取られ
若草に友と寝て見た日の高さ
草の露散るはなびらの色を吸ひ
草原にゆるき陽のあり慰ふ身を
草に伏し戒しめ難き心よな
朝風へ草ハツキリと青くなり
客送り出た三月は草光る

親牛も仔牛も草にねころべり

思ひなほしてほし草の青さ
(軸三十の俺へこの春淋しいぞ

席題 命

進示

限りなき命ある時考へる
命永らへて邪冤にされてゐる
我が命世間の命縁を取り
蝕はる命を覺る日のありて
作業場に命がほし音がする
ひざまく命に加へられし鞭
捧げた命うしろを振りむかず
一本のつなを命の電工夫
命數の事をベッドに考へる
現實の手にもてあそばれたる命
宇宙の一角へはかなく消えし命

昌一

迷兆

同

悟

變

迷兆

克

美

人

迷兆

變

昌一

波

樓

光

豐

次

風

司

堂

竹

悲

虎

ゆ

一

乃

字

昌

一

同

同

豐

次

同

進示

風選

よし

した

悟

乃

字

昌

一

同

同

豐

次

同

進示

風選

よし

した

悟

乃

字

昌

一

同

同

豐

次

同

進示

風選

よし

した

悟

乃

字

昌

一

同

同

豐

次

同

進示

風選

よし

した

悟

乃

字

昌

一

同

同

豐

次

同

進示

風選

よし

した

悟

乃

字

昌

一

同

同

豐

次

同

進示

風選

よし

した

悟

乃

字

昌

一

同

同

豐

次

同

進示

風選

よし

した

悟

乃

字

昌

一

同

同

豐

次

同

進示

風選

よし

した

悟

乃

字

昌

一

同

同

豐

次

同

進示

風選

よし

した

悟

乃

字

昌

一

同

同

豐

次

同

進示

風選

よし

した

悟

乃

字

昌

一

同

同

豐

次

同

進示

風選

よし

した

悟

乃

字

昌

一

同

同

豐

次

同

進示

風選

よし

した

悟

乃

字

昌

一

同

同

豐

次

同

進示

風選

よし

した

悟

乃

字

昌

一

同

同

豐

次

同

進示

風選

よし

した

悟

乃

字

昌

一

同

同

豐

次

同

進示

風選

よし

した

悟

乃

字

昌

一

同

同

豐

次

同

進示

風選

よし

した

悟

乃

字

昌

一

同

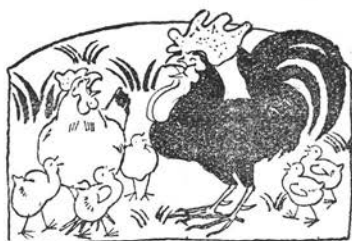
同

豐

次

同

進示



編輯の窓 町記二

▼もう春です。樹々の若芽が私達若い者のこころをそよります。三月號には是非共書かなければならなかつた記事をも本號で報告することになりました。

▼二月十六日、大軌沿線小阪町の小學校で、五年から高等二年までの兒童六百名並びに父兄に對し、路郎主幹は約二時間に涉つて、川柳に關する講演をされ講演後川柳の試作を試みられたところ、作句者三百六十九名、句數四百三十四句を得、その結

果を「小阪教育」へ執筆發表されました。かくの如く多數の小さな魂に川柳の詩魂を植へつけたのは劃期的レコードで、恐らく柳壇空前の試みであらうと思ひます。そして面白いことには、作品の出來は、五年生が一番うまくて、上級になるに従つて、だんだん落ちてきて、個人作句數は上級はご澤山作り、句振りも大人びてゐたといふ興味ある結果を得られました。

▼大丸の新館四階で「子供をよくする展覽會」を二月中旬に開催されたので、主幹は子供に關する句(父のみたる子供、母のみたる子供及び子供自身の作)を繪行燈に染筆され、繪は田村孝之介畫伯が筆を執つて、多數出品され、會場に精彩を添えられました。

▼本誌に毎號「武玉川初篇研究」の稿を寄せられてゐる森東魚氏の

が、本社三月例會に御出席になりましたので、句會終了後、鳴門に同氏を圍んで、路郎主幹、紳樂、翠夢、綠雨、變人、白峰の諸君が一夜を歡談いたしました。尙同夜期待してゐた、花岡百樹氏は風邪のため、お顔が見えず、残念に思ひました。

▼「武玉川初篇研究」は柳壇近來の大研究として各方面から注目され、權威ある新聞雜誌(例へば「國語と國文學」の藤村作博士、關西日報主筆高梨望岳樓氏の如き)に認められて紹介の筆を執らしてゐます。單に本誌の誇りに止まらず、柳壇の喜びでなければなりません。

▼前號寺川信氏の「武玉川研究疑義」に對する應答として、同研究筆者の秋の屋、東魚の兩氏から更に御意見を寄せられました。

▼木村半文錢氏の「千日前今昔

史」は亡びゆく千日前の過去の面影を傳へる文獻として、興味ある讀物でしたが、今回で終結しました。次號から更に筆を改めて、諸君に見えられる筈です御期待を願ひます。

▼梅本塵山氏の「肱枕草紙」は號を追うて好評です。本號には更に「柳の絮」で御馴染の長野吉高氏の「だんだら模様」で誌上を飾ることが出來ました。

▼ユーモラスな筆に一抹の苦さをたゝえた名文で鳴る亂耽君が「硝子の室」を書きました。

琴人君は久し振りに「作爲といふことに就て」筆陣を張りました。大抵の川柳が、作爲に出發し、作爲を除いては何物も残らないといふ致命的誤謬へ下したメスとして、御味讀を願ひます月評は新たに亂耽、華水兩君を加へて、琴人、二南の顔觸。私も「斷章」を續けました。

投稿規定

- ▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▼「近作柳樟」は全作家の雜吟を募る
- ▼「川柳塔」への投句は同人及び社友に限る。
- ▼光耀抄は女性作家に限る。
- ▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。
- ▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認める事。
- ▼書體はなるべく楷書「川柳雜詩原稿」を封筒に朱記する事。
- ▼締切は嚴守されたし。
- ▼投稿其他につき御間合はすべて返信料封入の事。

募 集

第十卷第六號課題

四月五日締切
(各題十句以内)

- 突 然 前 田 五 健 選
- 眼 鏡 福 田 山 雨 樓 選
- 愁 阿 部 閑 生 選

第十卷第七號課題

五月五日締切
(各題十句以内)

- 終 點 關 本 雅 幽 選
- 兄 弟 朝 田 新 水 選
- 土 產 物 福 田 鶴 峰 共 選
- 須 崎 豆 秋 共 選

每 號 募 集

- 近作柳樟(十句以内) 麻 生 路 郎 選
- 光耀抄(十句以内) 麻 生 叡 乃 選
- 各地柳壇(會報)
- 文章(評論研究感想吟行漫文)

社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定 價

一 部 金 拾 錢
 中箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
 壹箇年前金(特輯號共)壹圓六拾錢
 (半々年分以上御送金の方に)
 (は投句用箋を贈呈致します)

廣 告 料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼請代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てます御不在中でも預ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號より御指承願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和八年 三月廿五日印刷
 昭和八年 四月 一日發行
 第十卷第四號
 (毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻 生 幸 二 郎
 大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

發行所 川 柳 雜 誌 社
 大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

事務所 大 阪 市 住 吉 區 平 野 西 之 町 八 三 番 地
 川 柳 雜 誌 社

振替大阪七五〇五〇番
 電話天王寺一六七番

實業書店
 (大阪) 大賣捌 二盛社書店。(明文堂 其他 市内 各書店)
 (東京 仲見世) 玉 森 堂 (神戶) 米田、實文館(函館) 石 鏡
 (京都) 三宅 (松山) 弘文舎 (石川縣) 小松はかりや

道ブラから公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなった。本は寶石などのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本がこんなに安く買へる時代が来たことは我々讀書子にとつては有難いことだ。安い本をもつと安く讀む方法として古本を買へばいい。古本と云つても由食本のことでない。古本が非衛生的に考へられてゐた時代は遠うの昔に過ぎてしまつた。道ブラの次でに公立社の棚なのぞくことを一つの趣味としておすゝめしたい。

(路郎生)

古

本

は

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました從來の店はそのまま營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入
電話 南 五 六 二 番

加茂川句會

日時 四月十日(月)午後七時
會場 仲源寺(京都四條繩手東入)
兼題 「花盛り」三句 司郎選
會費 金 參 拾 錢
京都市嵐山天龍寺前平岩方
京都支部

畫の會

(日時) 四月七日午後一時
(題) 「雲雀」三句
(所) 京都市住吉區平野西之町八三 橋本綠雨

天王寺支部會

(日時) 四月十三日午後七時
(題) 「夜櫻」三句
(所) 大阪天王寺區北河堀町六九 幹事 福田 鶴峰

光笑會

(日時) 四月十一日夜
(所) カナメ喫茶店
(題) 「禿」三句
京都市南區疊屋町六 幹事 永田里十九

社告

本社の例會案内希望の方は左記
へお知らせをお願いします
大阪住吉區旭町三ノ一四
會報係 須崎 豆秋

道ブラから天牛へ

書籍 天牛本店

大阪住吉區日本橋南詰東入
南側(電話南二七四九番)

懸賞川柳募集

題「國防」 路郎 選
四月十日締切
その他雅吟を募る
▼用紙 官製ハガキ(化粧柳壇と明記の事)
▼賞品 秀逸數句導謝を呈す
▼投吟所 大阪市玉出本通三の三六 麻生路郎氏宛
化粧新聞社

川柳雜誌投句用箋

本社制規の投句用箋を左の價額で御用を御使用下さい。なるべく此用箋を御使用下さい。
五〇枚綴二冊(送料共)
御申込は本社事務所宛。
(一錢切手代用不苦)

川柳手拭

二種 路郎主幹
金三拾錢
(送料共)

工口派來たる べからず 鯨飲派來たる べし

(キング讀本より)

キングの横顔

満洲國のビラが四方の壁にはげられてある「歡迎和平信者國聯調査團」とか、中には陸軍中將森連の署名もある今にもフアツシヨの嵐のまきおこりそうな、おつかないビラがあるなごこの所全く非常時喫茶店と言ふ感じである。トラヒストの彫刻、鐵齋の歡喜の額、支那のお面、ふぐ提灯、住吉踊の人形、油繪、そして路郎師自筆の短冊

が、E.T.C.・E.T.C. 華人の手によつて按配せられてある風景——これ等のものが醸す微妙なるアトモスフヒアはとて私の拙筆では畫きつくせない所謂ビヨンド、デムクリプシヨンである。

だからその實感を味ひたいと思ふ人はアズスリン、ナズ、われ等のキングを一度おとづれて見るべきである。實感ば川柳家にとつては大切なものだからね

(吾民氏雜文の一節)



南海本線玉出本通三(十五間道路北の辻西)

喫茶
洋酒

キング喫茶室

電話天下茶屋二五七九番

にきびとり

び がん すゐ

美顔水

面白い様に効く！

年々の信用！的確の効果！

▲ニキビ吹出物に——頑固なニキビ吹出物にも本當に研かに、而も何等の副作用をも伴はず、目に見えてよく効くので、非常な評判です！年々の信用！効果は彌々向上してゐます！

▲眞正の美の成長——尚ほ少量づゝ常用すればニキビ吹出物を防ぎ、適度に脂肪を去り、キメを細かに艶をよくし、磨き込んだやうに美しくなりますので大へん喜ばれてゐます！

▼素顔の美を貴び

御家庭人の親友▲



桃谷順天館 元寶 株式會社

大正十三年三月三日第三版（毎月一日發行）
昭和八年三月廿五日印刷（昭和八年四月一日發行）

川柳雜誌（第一一一號）

定價金三拾錢